

土居成遺跡発掘調査報告書

広瀬統合中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月

安来市教育委員会

土居成遺跡発掘調査報告書

広瀬統合中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月

安来市教育委員会

卷頭図版 1



土居城遺跡全景

例　　言

1. 本書は広瀬統合中学校建設に伴い、広瀬町教育委員会（当時）が平成15年度に発掘調査を行った土居成遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査組織は以下の通りである。

【平成15年度　現地調査】

調査主体 広瀬町教育委員会 教育長 村上晴夫

調査指導 島根県教育庁 文化財課

事務局 加納 弘（教育次長）

内田雅巳（文化財係長）

石原敬治（文化財係主任）

舟木 聰（文化財係主任主事）

今岡利江（臨時職員）

山本千草（整理作業員）

発掘調査参加者

朝木絹子、朝木光子、稻田安恵、岩田博道、岩田政男、加納敏広、蒲生 盛、木村ナオミ、坂田真一、竹内一衛、椿 雅子、土居寿磨子、藤原康枝、舟木正幸、松坂唯男、松坂トモコ、山根広志、山根良信、吉岡芳広

【平成18年度　報告書作成】

主体 安来市教育委員会 教育長 石川隆夫

事務局 木戸修一郎（教育次長）

石田行生（教育総務課課長）

中島 登（教育総務課副参事）

妹尾秀樹（教育総務課主幹）

江田哲也（教育総務課主幹）

水口晶郎（教育総務課主任）

大塚 充（教育総務課主任）

舟木 聰（教育総務課主任）

田中強志（臨時職員）

泉あかね（臨時職員）

是田和美（臨時職員）

吉田 博（整理作業員）

山尾志保（整理作業員）

3. 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

【史跡富田城跡総合整備委員会委員（所属・職名は調査当時のもの）】

藤岡大拙（島根女子短期大学学長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、河瀬正利（広島大学教授）、
小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）五味盛重（建造物保存技術協会参与）、山根正明（松
江南高等学校教諭）、柳臣正見（広瀬町文化財専門委員）、足立武夫（広瀬町文化財専門委員）、
山崎享二（出雲尼子を興す会会长）、松崎美弥子（出雲尼子を興す副会长）、金子義明（広瀬
町立歴史民俗資料館嘱託員）
蓬岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、今岡 稔
(島根県文化財保護指導委員)、勝部智明（島根県教育庁文化財課）、木原 光（益田市教育委員
会）、梅木茂雄（江津市教育委員会）寺井 裕（中世城郭研究会）

4. 本書に使用した第1図は国土交通省国土地理院発行50000分の1のものを使用した。

5. 本書に使用した実測図は以下の者が作成した。

（遺構実測）舟木、今岡利江

（遺物実測）舟木、田中、吉田

（浄　青）泉、吉田、山尾

6. 本書に使用した遺構及び出土遺物の写真は舟木が撮影した。

7. 本書の編集・執筆は舟木が行った。また巻末には附編として、今岡 稔氏に玉稿を賜った寺山
城跡の踏査報告を掲載した。

8. 出土した遺物及び本書に掲載した遺構・遺物の実測図及び写真は安来市教育委員会で保管して
いる。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯	5
第Ⅲ章 調査の概要	5
第Ⅳ章 出土遺物	26
第Ⅴ章 総括	39
附編 寺山城踏査記	42

第Ⅰ章 位置と環境

安来市は島根県東端、鳥取県との県境に位置する。この地域は戦国期～江戸初期にかけて、出雲国をはじめ、山陰・山陽支配の中心拠点として栄え、戦国期には出雲国の戦国大名尼子氏の本拠地として繁栄した地域である。

中でも十居成遺跡の所在する広瀬町は、尼子氏の居城であった富田城跡を中心とし、城館遺跡が特に集中している地域である。⁽¹⁾ その多くは山城跡であり、開発行為の及びにくい山上に位置しているため、遺構の保存状態は比較的良好であるが、低丘陵上や平野部に位置するものについては後世に宅地や耕作地などとして開発され、遺構が損壊もしくは消滅しているものもある。

富田城跡は、標高約190mの月山山頂部を中心とし、北方を流れる飯梨川（旧名、富田川）に向かって馬蹄形に伸びる丘陵部を含んだ、周囲約1.5km四方に及ぶ大規模な城砦である。

昭和9年に国の指定史跡となった後、昭和52年の石垣修理に伴う山中御殿平地区の発掘調査を皮切りに、史跡整備に伴って山頂部及び山麓の曲輪群について発掘調査が行われ、多数の遺構と遺物が発見されている。

富田城跡の北東新宮谷一帯には、尼子国久ら新宮党の居館跡とされる県史跡新宮党館跡を中心とした新宮谷城館跡群、そして南西の塩谷一帯には大規模な城館遺構である明星寺・塩谷城館跡群が存在し、これらについても幾度か発掘調査が行われている。

飯梨川の河床部分には、富田城の城下町遺跡である富田川河床遺跡が存在する。寛文6年（1666）の大洪水によって水没し、以後幻の城下町と言われてきたが、昭和30年代に入っての上流でのダム建設や、富田橋の下流に堰堤が建設されたことによって、上流からの流砂がなくなった。加えて遺構面を覆っていた砂が下流へ流れられたため、昭和39年頃から徐々に遺構が露呈するようになった。

正式な発掘調査は昭和49年の第一次調査を皮切りに、その後河川改修等に伴って島根県及び旧広瀬町、旧安来市により平成4年まで断続的に行われた。

その結果、数多くの遺構、遺物が発見され、福井県・乗谷朝倉氏遺跡や広島県草戸千軒町遺跡等とともに、日本の中世遺跡や出土陶器についての研究の端緒となった遺跡として知られている。

日向丸城砦跡群は富田城跡の西側背後の山上に所在し、富山城跡の本丸西側曲輪群と尾根伝いにつながっている。最高所の「日向丸」は伝承では尼子氏の朝拝所と伝わる。林道建設に伴い、平成11年度に稜線上の曲輪が発掘調査され、曲輪平坦面と堀切が検出されている。⁽²⁾

京羅木山城砦跡群は安来市と東出雲町の境にまたがって存在する城砦群である。

天文12年（1543）周防の大内義隆が大軍を率いて富田城を攻撃した際に本陣が置かれたと伝わる城で、山頂部から尾根沿いに曲輪が連続している。特に東方尾根筋では枡形虎口と連続堅堀で防御を固めている。

勝山城跡は京羅木山城砦跡群の南東端に位置し、毛利氏による富田城攻略戦の際に最前線基地として使用されたと考えられている。構造上特徴的なのは、大規模な連続堅堀群と、中世城郭としては県下最大級といわれる枡形虎口を持つことである。

土居城跡は貞木氏の居城と伝わる城で、宇波公民館（旧宇波小学校）裏山に存在する。山頂部に小規模な曲輪を直線的に配し、山腹には居館部とみられる広大な曲輪が存在する。

明治30年頃、当時の宇波小学校の敷地造成中に、完形の備前系陶器壺（間堀編年V期、乗岡編年中世6期）が一点出土しており、現在は宇波公民館に所蔵されている。⁽³⁾⁽⁴⁾

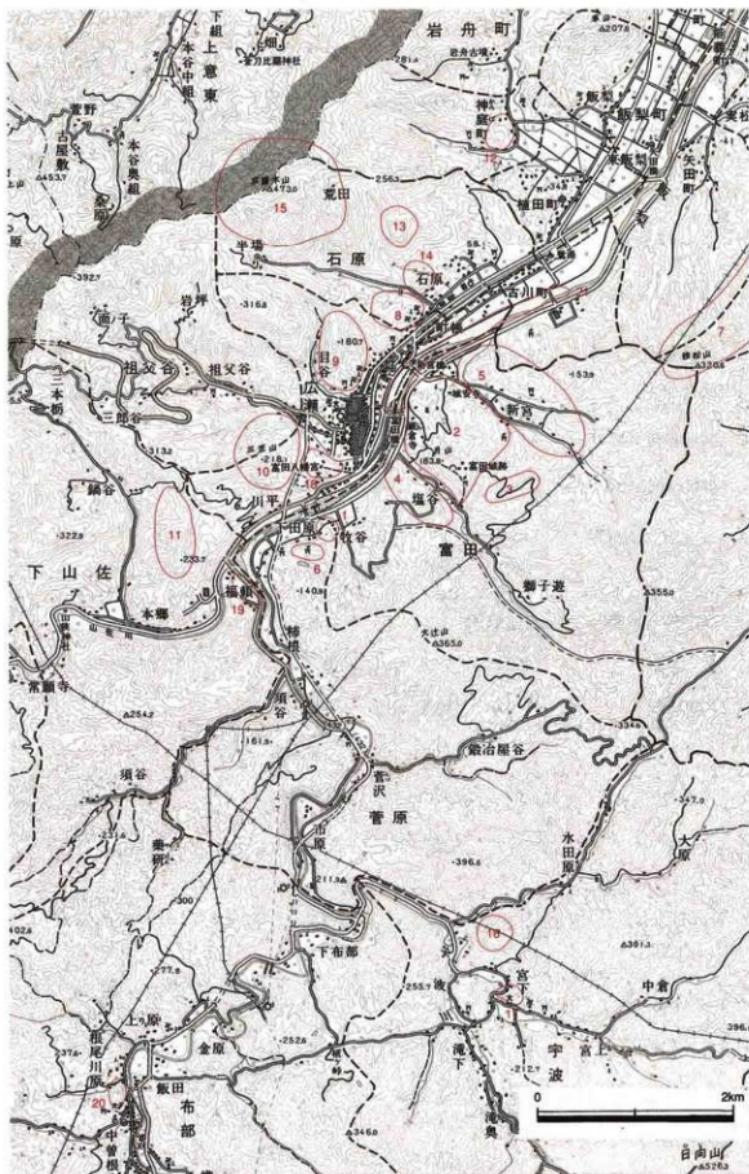
福頼城跡（福頼遺跡）は、福頼氏の居城と伝わる城跡で、飯梨川と山佐川の合流点に突き出た舌状丘陵先端に位置する。階段状に曲輪を配置し、主郭の背後には土塁と深い堀切が存在する。昭和62年、福頼団地造成工事に伴い調査が行われ、柱穴などとともに15世紀代の備前系陶器や青磁碗、土器擂鉢、土鍋などが出土している。⁽⁵⁾

布部城跡は元亀元年（1570）富田城奪還を目指していた尼子勝久、山中鹿介を中心とした尼子軍と毛利軍が激突した布部合戦の舞台となった城で、城主としては森脇市正が伝わる。急峻な山上に曲輪や堀切を配している。

以上に述べた城館遺跡は、富田城跡及びそれに関連する城館遺跡と富田川河床遺跡以外は学術的な発掘調査が行われた例がほとんどなく、多くは伝承や伝記物などの記述を元に考察されてきたため、この地域の中世、特に戦国期の様子はいまだ不明な部分が多いのが現実である。

（注）

- （1）『出雲・隱岐の城館跡』1998 島根県教育委員会
- （2）『史跡富田城跡発掘調査報告書（千疊平地区）附、日向九城砦跡群発掘調査報告』2004 広瀬町教育委員会
- （3）乗岡 実「中世備前焼壺（壺）の編年案」「第2回中近世備前焼研究会資料」中近世備前焼研究会 2000
- （4）『広瀬町史上巻』1968 広瀬町 ではこの壺を「窯変須恵器」という呼称で紹介している。
現在は宇波公民館で保管されている。
- （5）『福頼遺跡発掘調査概要』1987 広瀬町教育委員会



第1図 周辺の城館遺跡 (S=1/50,000)

表1 周辺の中世城館遺跡一覧

名 称	種 别	所 在 地	概 要	備 考
1 土居成遺跡	城館跡	広瀬町富田	礎石建物、掘立柱建 物、堀切、陶磁器	本報告書掲載
2 富田城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土壘、石垣、堀 切、礎石建物、掘立柱 建物、虎口、櫓列、陶 磁器、金属器、瓦	国指定史跡。 月山城、月山富 田城
3 日向丸城砦跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切	H11年度一部発 掘調査。
4 明星寺・塙谷城館跡 群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土壘、堀切	H17年度一部発 掘調査。
5 新宮谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切、陶磁器、 将棋駒	県指定史跡新宮 党館跡を含む。
6 寺山城跡	城館跡	広瀬町菅原	曲輪、堅堀	蓮華峯寺山砦
7 独松山城砦跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土壘、堀切、堅 堀	
8 亀井ヶ成、誓願寺裏 城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬、 石原	曲輪、土壘、井戸、陶 磁器	
9 大成山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土壘	
10 三笠山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、堀切	
11 絶塚山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪	
12 神庭横山城跡	城館跡	神庭町	曲輪	
13 勝山城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪、土壘、堀切、連 続堅堀、構形虎口	瀧山城
14 石原城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪	
15 京羅木山城砦跡群	城館跡	広瀬町石原	曲輪、連続堅堀、虎 口、土壘、堀切	
16 高小屋城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、堀切	宇波城？
17 土居城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、備前焼壺	一部損壊。宇波 城？
18 勝日山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土壘、堀切、井 戸	八幡山城、富田 八幡宮社地。削 平等により一部損 壊。
19 福頼城跡	城館跡	広瀬町下山佐	曲輪、土壘、堀切、柱 穴、陶磁器	消滅。S62年度発 掘調査。
20 布部城跡	城館跡	広瀬町布部	曲輪、堀切、土壘	布部要害山
21 富田川河床遺跡	集落跡	広瀬町富田～ 古川町	掘立柱建物跡、礎石建 物跡、道路跡、井戸 跡、風呂遺構、陶磁 器、瓦、木製品、石製 品、金属器	富田城城下町遺 跡。

第Ⅱ章 調査に至る経緯

平成14年度に当概地が広瀬町統合中学校建設予定地として選定され、予定地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。この丘陵上には、以前から尼子方の武将の館があったといわれており、字名にも「土居成」「馬屋成」などがみられるところから、この付近に城館遺跡の存在する可能性が推測された。付近は昭和50年代に圃場整備工事が行われており、以前の地形から大きく改変を受けていたが、たとえ部分的であっても遺構が残存している可能性を考え、平成14年11月より予定地内の試掘調査を行った。

その結果、丘陵上のトレンチ数箇所において、柱穴とみられるピットや溝などを検出し、中世陶磁器などが出土した。また、丘陵東側の谷部からは落とし穴や縄文時代の遺物が出土した。

これらのことから、事前に発掘調査を行う必要があるため、関係部局との協議の結果、平成15年度において遺跡の本調査を行うこととなった。

発掘調査は平成15年6月16日～12月26日まで実施した。

第Ⅲ章 調査の概要

発掘調査は平成14年度のトレンチ調査で遺構が確認された地点を中心に、遺構面上層の遺物包含層上面まで重機により掘削を行い、その後は人力による掘削で調査を進めた。

調査の便宜上、調査区を丘陵のほぼ中心、遺構が集中している地点をI区、丘陵東側の谷部をII区、丘陵上北および北東の耕作地をIII区、丘陵西側の谷部をIV区と命名した。

遺跡は過去の圃場整備工事により削平を受けたため、遺構が消滅している部分もあったが、盛土により造成されていた部分については、遺構が良好な形で存在していることがわかった。

調査途中で遺跡の重要性が指摘されたことから、遺跡の現地保存が決定し、そのためほとんどの遺構は完掘せず、プラン確認にとどめることとした。

本報告における順序としては、中世城館に関わる遺構が検出されたI区とIII区を先に記述し、その他の時代の遺構が検出されたII区とIV区についてはその後に記述することとする。

1. I区

I区は丘陵の中心部、字名「土居成」付近を中心と設定した調査区である。I区は丘陵中央部の水田部分をI-1区、その南東上段の畑をI-2区、さらにその南東上段の畑をI-3区として調査を行ったところ、多数のピットと土壙、溝状遺構のほか、空堀跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡を検出し、土師質土器や陶磁器、金属製品など中世の遺物が多数出土した。建物跡はいずれも堀切や他の建物の軸をある程度意識して建てられているように見受けられることから、同時期もしくはそれほど時期差なく建てられたものと考えられる。

(1) 建物1

I-1区はほぼ中央付近で検出した礎石建物跡である。規模は南北約6.8m、東西約14mを測る。柱間距離は基本的に6尺5寸（約197cm）を意識しているとみられるが、南東及び南西側の隅角部には礎石が3個集中している。礎石と礎石の間には浅い溝が掘られており、そこに土壁の基礎とみられる礎が焼き詰められ、間柱用とみられるやや小ぶりの礎石も置かれていた。

壁の基礎となる礎群の敷設状態からみて、間取りはおおよそ3区画からなるとみられる。

区画AはL字状の区画で、床面に粘土が貼られていることから、上間であったと考えられる。この南東部の床面は被熱により赤く変色しており、付近の礎石まで赤く焼けている部分がある。このためここでは日常的に火を用いてなんらかの作業が行われていたとみられる。

区画Bは床面に礎石が複数設置であることから、この区画には床が張られていたものと考えられる。また、この区画の北隅付近の礎群が幅約1mほど途切れていることから、ここが部屋への出入り口であったとみられる。

区画Cは北側と西側の大部分で礎群が検出されなかった。後世の搅乱による欠損であるとも考えたが、西櫛南西隅から北へ礎群が2mほど続いた後、礎群敷設用の溝状の掘り込みもここで止まっており、これより先には掘られていないように見受けられた。このことからこの部分には本来壁が存在せず、この区画は作楽場などのオープンな空間であった可能性も考えられる。しかし建物跡中央に設定したサブトレーナーでは、上面では見えなかった石列の基礎部が検出されたため、この区画については今後さらなる調査・検討が必要である。

建物1の北部には、壁面から北へ約2m離れたところに礎石が2個設置されていた、建物1の壁面の礎群がこの2つの礎石とほぼ同じ間隔で途切れる部分があることから、この礎石列は建物1の入り口に隣接した礎石の可能性もある。

遺物は床面から壁上の断片と鉄釘の他、青花と白磁、京都系土師質上器皿の小片が出土したが、この建物の年代を特定できるような遺物はなかった。

(2) 建物2

I-1区西側で検出した北東—南西を主軸とする掘立柱建物跡。東側は大型の土壙と切りあっているのに加え、未調査部分へも延びる可能性があるため、全体の規模は不明であるが、検出部分での規模は短辺約5m、長辺約12mを測る。中央付近には間柱とみられるピットを2個検出した。現況では梁行1間×桁行6間の建物で、柱間距離は桁行約2m、梁行は約2.5mである。

(3) 建物3

建物2の北側に隣接する建物跡。規模約4×4m、2間×1間の建物で、柱間距離は約2mを測る。

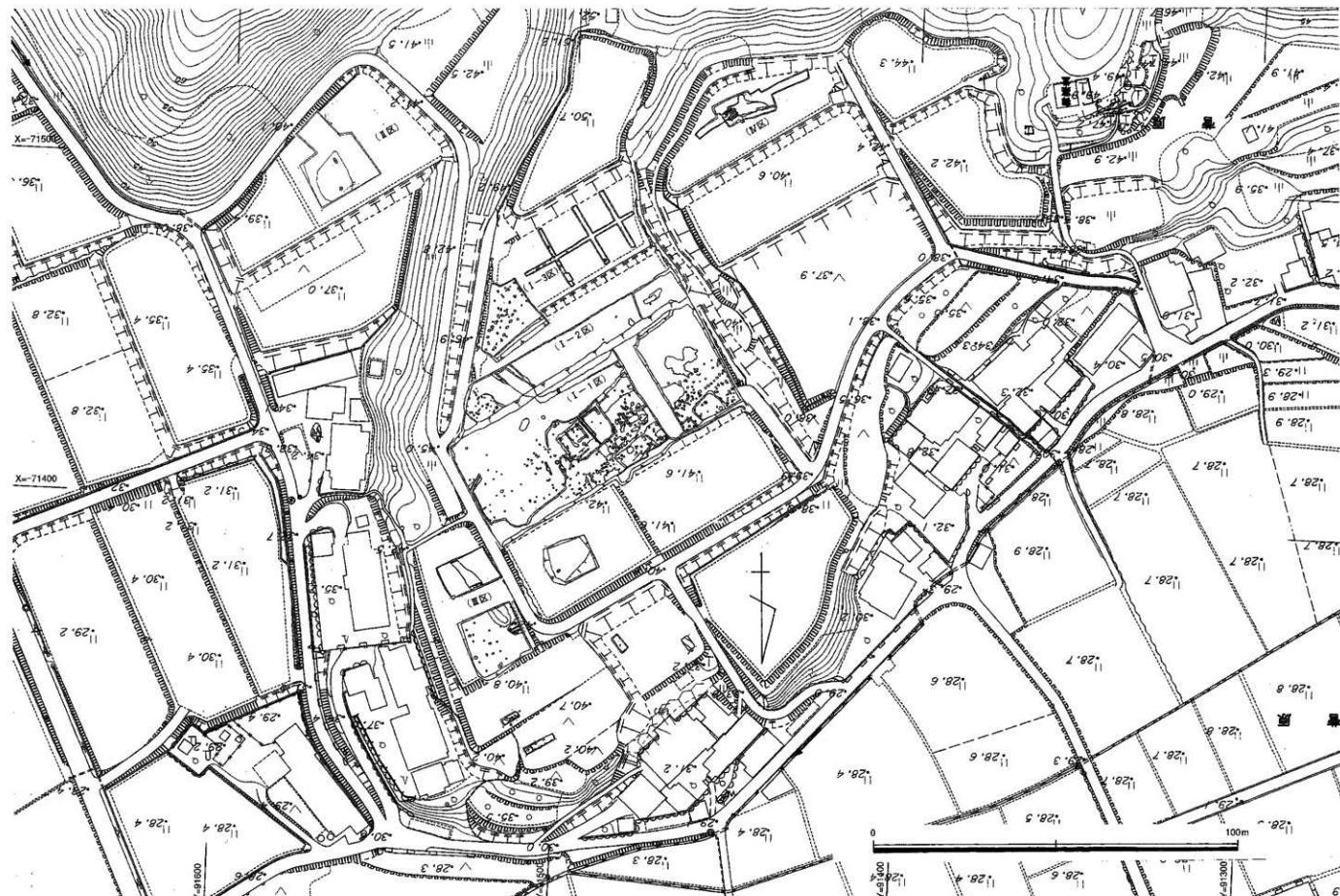
(4) 建物4

I-1区西端で検出した掘立柱建物跡。建物の西側部分は調査区外であるため全容は不明であるが、検出部分の規模は、長辺8m、短辺2mほどで、柱間距離は短辺側が約2m、長辺側が約2.5mを測る。

東側には建物に平行してピット列があり、縁側もしくは庇が付属していたものとみられる。

(5) 建物5

建物2とほぼ重なるように存在する掘立柱建物跡。建物2とは主軸が南側に約4°ずれている。



第2図 土居城遺跡全体図 ($S=1/1,000$)

建物 2 と同様、大型上層と未調査部分にかかるため全体の規模は不明であるが、検出部分での規模は梁行約 5 m、桁行約 10m を測る。柱間距離は桁行梁行共に約 2.5m を指向しているとみられる。

(6) 建物 6

建物 1 の東で検出した掘立柱建物跡。プランはおおよそ 3 m × 4 m の長方形を呈する桁行 2 間 × 梁行 1 間の建物であり、南東壁に並行して庇とみられるビット列が存在する。

(7) 建物 7

I - 1 区東端部で検出した建物跡。幅 20cm 程度のビットが、東西軸は柱間 2.5m でビットが 3 個並び、中央のビットから南に 3 m のところにもビットがある。この付近は過去の廻場整備の際の削平が遺構面に達しているとみられ、そのため柱間の間隔が大きい部分に関しては、本来存在したビットが消滅している可能性もある。現存部分の規模は南北約 14.5m、東西約 10m を測り、柱間距離も 2.5m、3 m、5.5m の部分があり一定ではない。

(8) 建物 8

I - 3 区東側で検出した桁行 3 間 × 梁行 1 間の掘立柱建物跡。主軸を北東 - 南西にとっており、柱間距離は桁行部分が約 2 m、梁行部分が約 3.5m となっている。遺構に伴う遺物は検出していない。

なお、この建物跡も含め I - 3 区東半部では多数のビット群を確認した。しかし I - 3 区西半部ではビットが全く見受けられることから、西半部は広場としての空間利用が推定される。

(9) 溝状遺構 1

建物 1 の北西に存在する。長さ約 12.5m を測るが、内側は他の遺構と重複しているため、正確な長さは不明である。幅は約 50cm。覆土上面からは土師質土器や陶磁器、土製品、魚骨など、多数の遺物が出土している。

(10) 溝状遺構 2

建物 2 の北西にある一辺約 7.7m の方形プランの溝状遺構。北辺部は削平により消滅している。溝の内側には、ビット数個を検出したが、建物等に復元できるものはなかった。

遺物は東辺の溝内部から糸切底の土師質土器皿一点が出土している。

(11) 溝状遺構 3

溝状遺構 2 の東に隣接する。南西のコーナーを検出したが、東側部分は未調査で、北辺部は削平されているため規模は不明である。溝状遺構 2 と軸を揃えていることなどから、同様な形状の遺構と考えられる。溝の内側で検出したビットの内、溝に沿うように存在する 3 つについては、柱間距離が約 2 m で揃っていることから、建物跡になる可能性がある。

(12) 溝状遺構 4

北側は未調査のため全体像は不明であるが、平面形はアルファベットの「H」字状を呈する。南辺部は溝状遺構 1 によって切られている。溝の内側にはビットと上横らしきプランが見られるが、建物等に復元できるものではなく、またこの溝との関係も不明である。遺構に伴う遺物は出土していないため、構築時期は不明であるが、溝状遺構 2 および溝状遺構 3 と主軸が同じことなどから、これらと同時期のものである可能性が高い。

(13) 堀切 1

I - 1 区から I - 2 区にまたがって存在する。今回の調査では確認しなかったが、I - 3 区北東部にまで延びている可能性が高い。I - 3 区北東端から北西方向へ約 20m ほど延びたところで南北

方向に向かって屈曲し、そこからさらに20mほど延びたところで消えている。それ以上伸びる可能性もあるが、削平を受けているためかそれ以上プランを確認できなかった。I-2区部分は遺存状態が良好であるが、I-1区部分は柵場整備時に削平を受けており、かろうじて底部付近が残存している状況であった。I-2区部分にサブトレンチを設定し調査を行ったところ、断面形状はV字状を呈し、上端部の幅約3.5m、堀底の幅70cm、深さは約1.6mを測る。内部は黒色土を中心とした土で埋没していた。うち第8層から備前系陶器壺の体部破片が出土している。

2. III区

III区はI区の東及び南側の柵場に設定した調査区である。I区東側の柵場以外は数箇所トレンチを設定し、ピット群や堀の可能性のある遺構を確認したが、遺跡の保存が決定したこともありそれ以上の調査は行わなかった。ここではある程度遺構の状況が把握できたI区東側柵場部を中心に述べていくこととする。

(1) 堀切2

南北東-北西方向を軸とする。検出部分の長さは約24m、堀幅は北側にいくほど広がっており、最大幅は約5mを測る。南端部に設定したサブトレンチでは、幅2m、深さ70cmほどしかなく、この付近で堀は収束しているとみられる。北側サブトレンチでは幅3.7m、深さ1.1mを測る。堀の断面形状は南端ではV字状であるが、北側部分では緩やかな逆台形になっている。遺物は南端のサブトレンチ覆土上面より備前系陶器の水屋壺とみられる口縁部破片が、また北側覆土中からは褐釉陶器壺底部が、堀底から占満戸灰釉皿の破片と骨片が出土したが、骨片は遺存状態が悪く、種類は不明である。

(2) 貼石土壤

堀切2の北側に隣接して存在する遺構である。西側調査区外まで続いているが、未調査であるため具体的な規模などは不明である。検出部分の規模は長さ・幅とも約4mを測る。遺構の壁面には石組が施されている。この石組は一見すると全周しているように見えるが、南側壁面の石材が地山上に積まれているのに対し、北側壁面の石材は遺構埋没土の上に散乱しているように見受けられることから、これらは本来南側壁面に積まれていたものが転落したものである可能性がある。この遺構から出土した遺物としては、石組の石材として転用されていた来待石製宝篋印塔の相輪の一部の他、備前系陶器壺の破片、基筒底の青花小皿、褐釉陶器壺、瀬戸美濃天日茶碗、茶臼破片、瓦質土器などが出土している。

この遺構の性格については現在のところ不明と言わざるを得ないが、この遺構の位置を隣接する堀切2と合わせて考えた場合、I区で検出した堀切1とよく似ていることから、空堀遺構である可能性もあるが、この遺構にだけ壁面に石材が積まれていることや、出土する遺物は茶の湯に関係するものが目立つことなどから、園池遺構である可能性も否定できない。

3. II区

土居成丘陵の東側谷部に設定した調査区。試掘調査時に落とし穴（SK01）が見つかったこと

から、周辺を拡張して調査を行った。

その結果調査区ほぼ中央付近は島状に地山面があり、その周囲は黒色土がドーナツ状に堆積していた。地山は真砂上を主体としたもので、そこから落とし穴2基を検出した。

この他、調査区南部の黒色土中から縄文土器片と石器類が多数出土したため、この部分については黒色土の掘り下げをおこなったが、遺構は検出されなかった。

(1) SK01

長軸約1.6m、幅約70cm、深さ約70cmを測る。さらに底面のほぼ中央に径約13cm、深さ約10cmの小ピットが掘られている。内部から遺物は出土していない。

(2) SK02

長軸約1m、幅約85cm、深さ約60cmを測り、底面の南壁面に接するように径約16cm、深さ約17cmの小ピットが掘られている。遺物は第1層中から縄文土器片が数点出土している。

4. IV区

IV区は土居成丘陵の西側谷部に設定した調査区である。トレント調査時に周辺から瓦や陶器の破片に混じって大量の焼土、窯壁の破片などが出土したことから、周辺に窯跡がある可能性を考えて調査を行った。その結果、山際に位置する窯場において連房式登り窯一基と物原（不良品捨て場）を検出した。物原及び窯跡周辺から出土する器種は、若干の雜器類（片口、碗、皿、蓋など）の他は瓦と瓦用の窯道具を中心であることから、この窯では主として屋根瓦を焼成したものとみられる。

窯の天井など上部施設は残存しておらず、わずかに西壁の一部と、床面に房の壁の基底部及び焼成段のレンガが6列残存しているのみであった。西壁には焼成時に内部を確認するための穴があり、円錐状の蓋がはめ込まれたままの状態であった。

焼成房は2つあり、一部屋の規模は奥行き約90cm、幅約2.5mを測る。各房の壁は長さ約30cm、幅約23cm程のレンガが積まれていたとみられ、基底部のみが残存していた。各房の奥半分は床面が10cm程度高くなっている、その段差部分には長さ約38cm、幅15cmのレンガが貼られていた。このことから各房の手前側が焚室、奥側部分が製品を置く場所であるとみられる。

最も北のレンガ列の北側には、火の登りをよくするため、青灰色の粘土が傾斜をつけて貼られており、この部分に大口（一番最初に火を焚く所）が存在したとみられる。

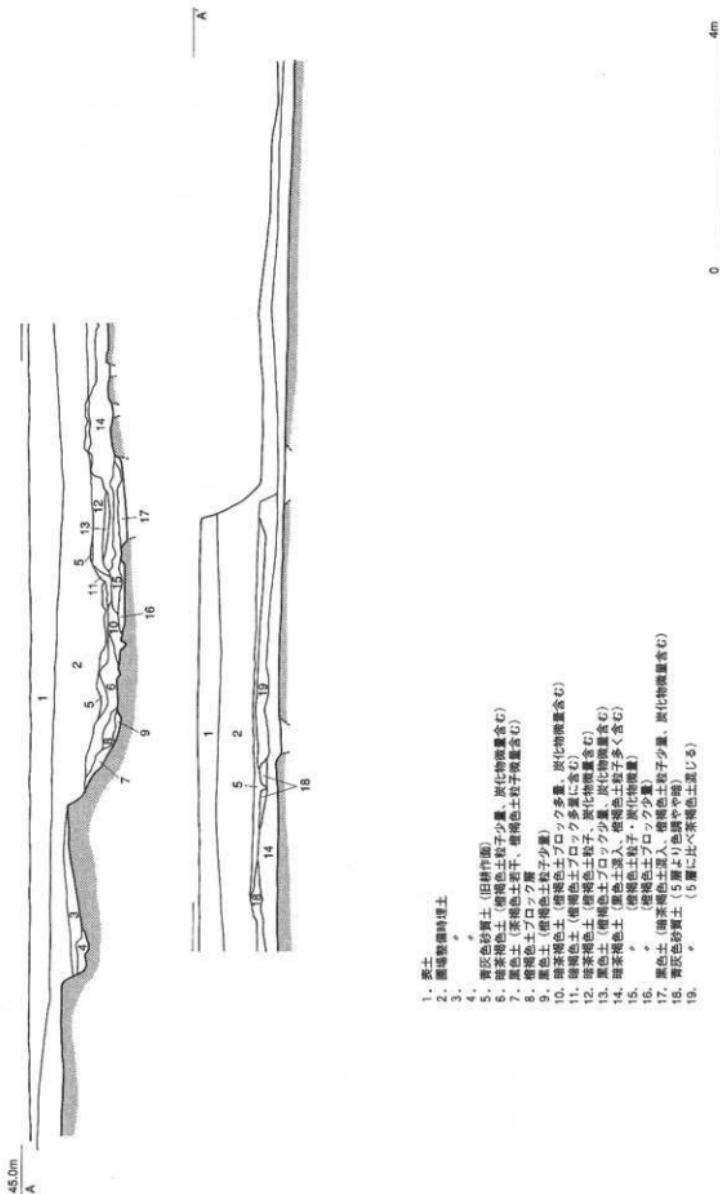
窯の南端のレンガ列は下段のレンガ列と違い、近接するように並べられているため、確証はないが、ここが煙出であった可能性がある。

窯の東側にはレンガなどで補強した、作業場とみられる段上のテラスが2段あり、こちら側に小口があったことがわかる。窯内部からは遺物はほとんど出土しなかった。

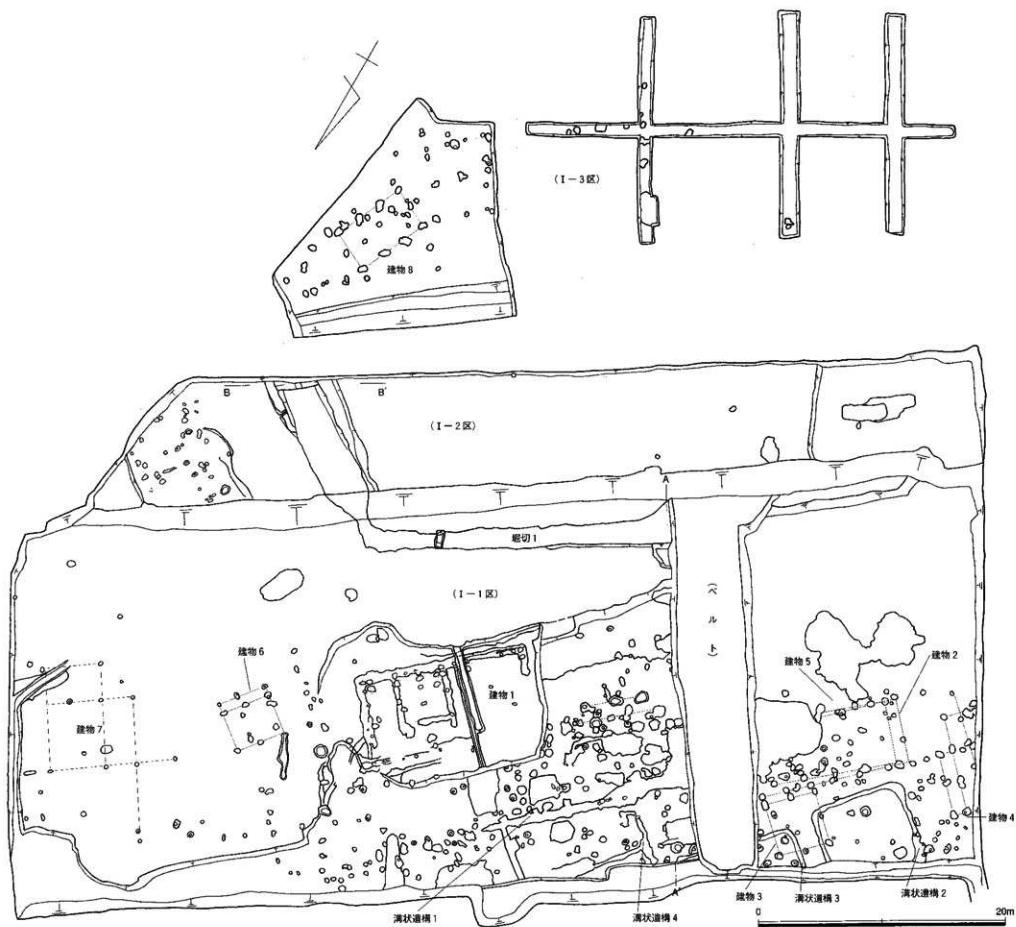
物原は窯の西側に隣接しており、その上を粘土層で整地し、端にレンガを並べて作業場に改造していた。物原北側の法面は、石垣上に積んだレンガで補強している。

遺物の主体は来待釉のかかった赤瓦と、瓦焼成用の窯道具がほとんどであるが、片口や擂鉢、碗皿類、蓋物も若干存在している。

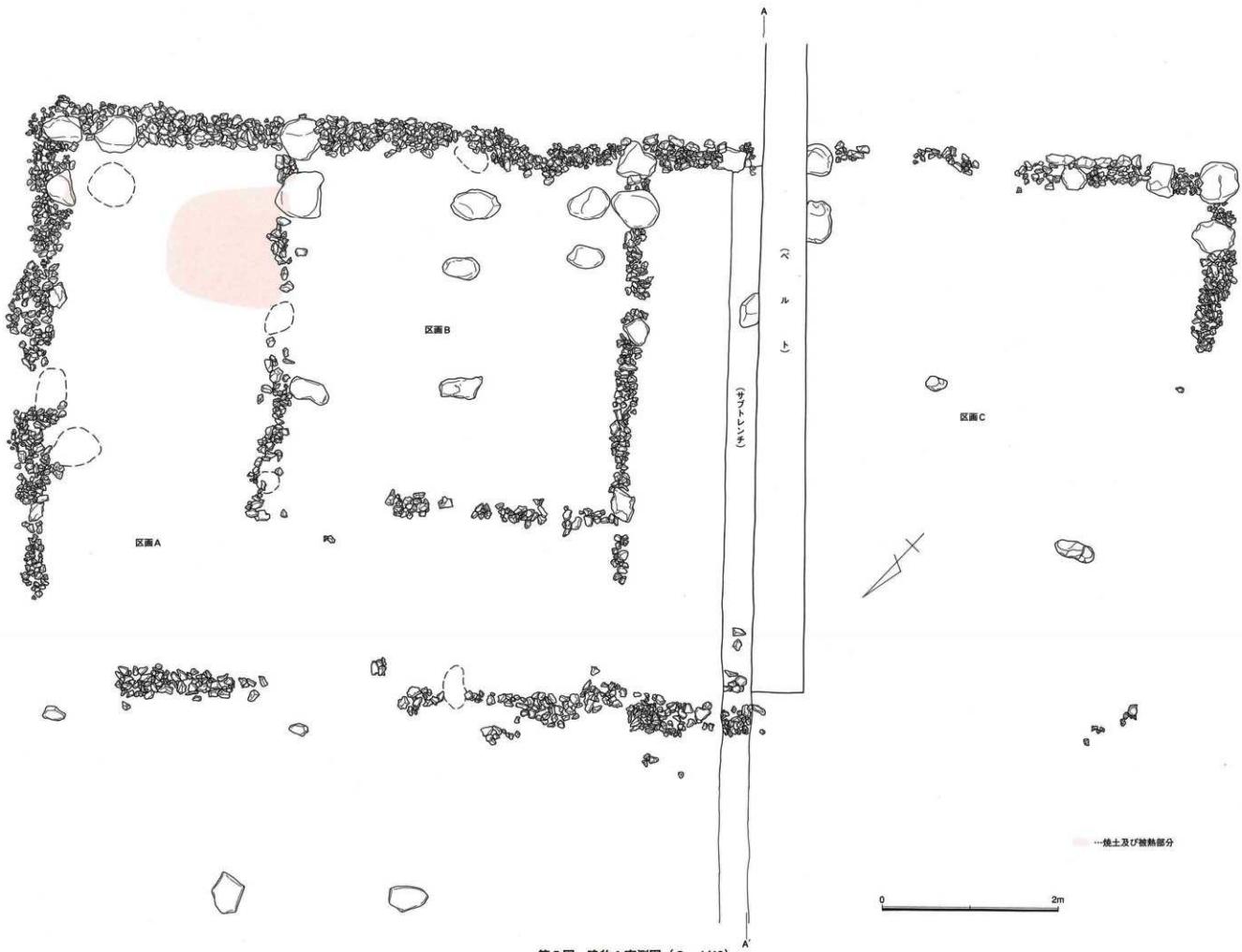
なお、広瀬町内の歯科医院となっている家の屋根にこの窯で焼かれたとみられる瓦が現在も葺かれていることを確認し、後日訪ねたところ、住人から築100年位経っていると聞いたとの証言を得た。



第3図 1-1区土壤図 (S=1/180)

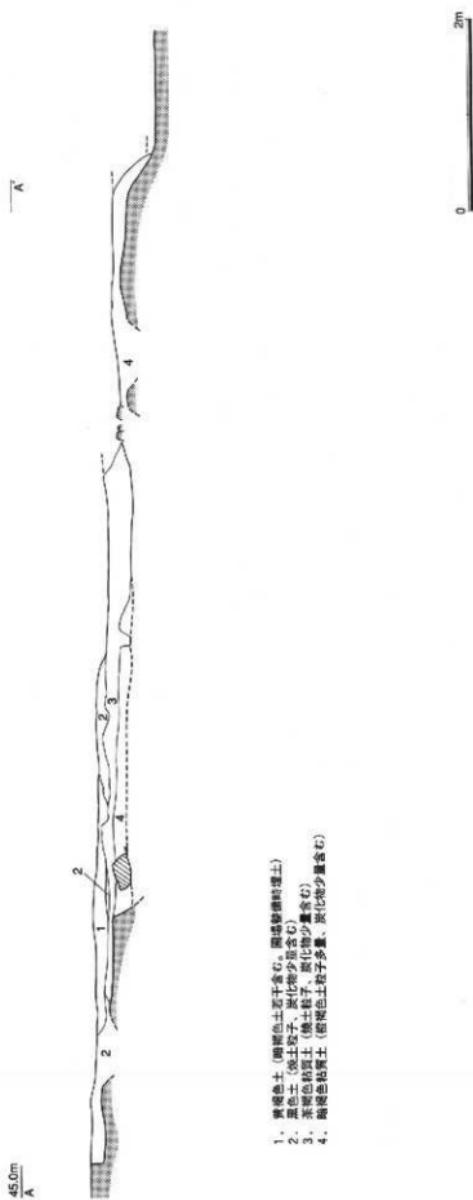


第4図 I区構造平面図 ($S = 1/300$)

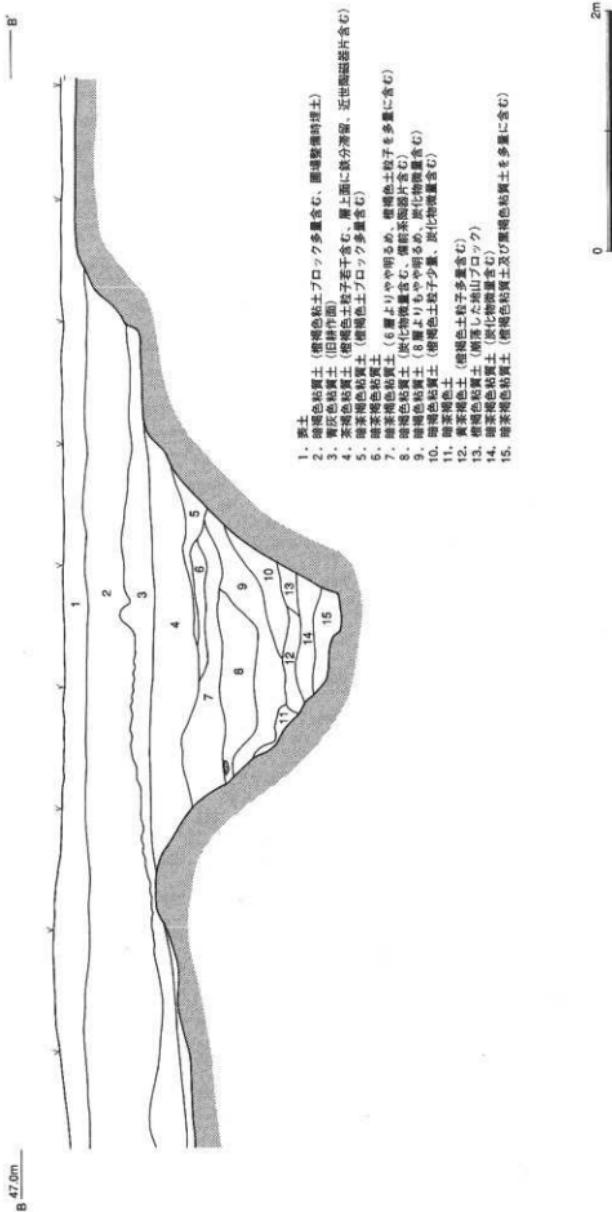


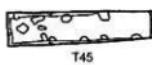
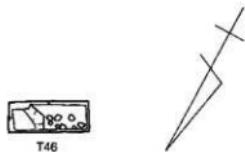
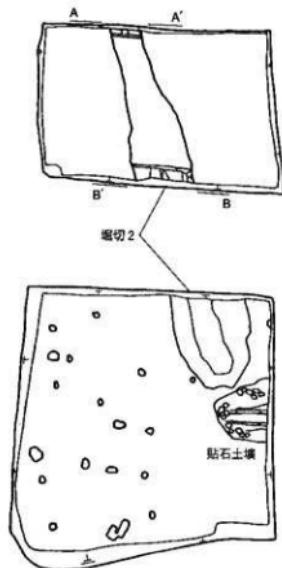
第5図 建物1実測図 ($S=1/40$)

第6図 建物1 土層図 ($S=1/50$)



第7図 摘切1 土層図 (S=1/40)

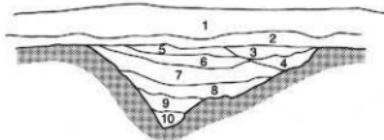




第8図 III区遺構平面図 ($S=1/300$)

A 43.0m

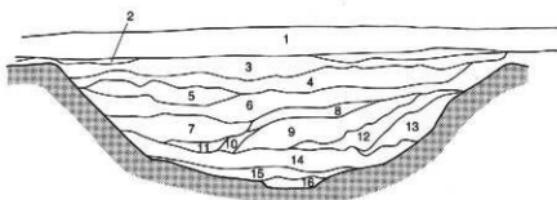
— A'



1. 表土
2. 暗褐色粘質土（櫻褐色土・黒褐色土ブロック少數含む）
3. 暗茶褐色粘質土（黒褐色土多量、炭化物少量、焼土粒子・炭化物微量含む）
4. 暗茶褐色土（櫻褐色土粒子・焼土粒子・炭化物微量含む）
5. 暗茶褐色粘質土（櫻褐色・黒色土ブロックを多く含む。粘性高め）
6. 暗茶褐色粘質土（櫻褐色・黒色土ブロック少量、炭化物微量含む）
7. 茶褐色土（櫻褐色土粒子・炭化物微量含む）
8. 赤褐色砂質土（鉄分多量に含む）
9. 櫻褐色土
10. 櫻褐色土（9層よりやや始め）

B 43.0m

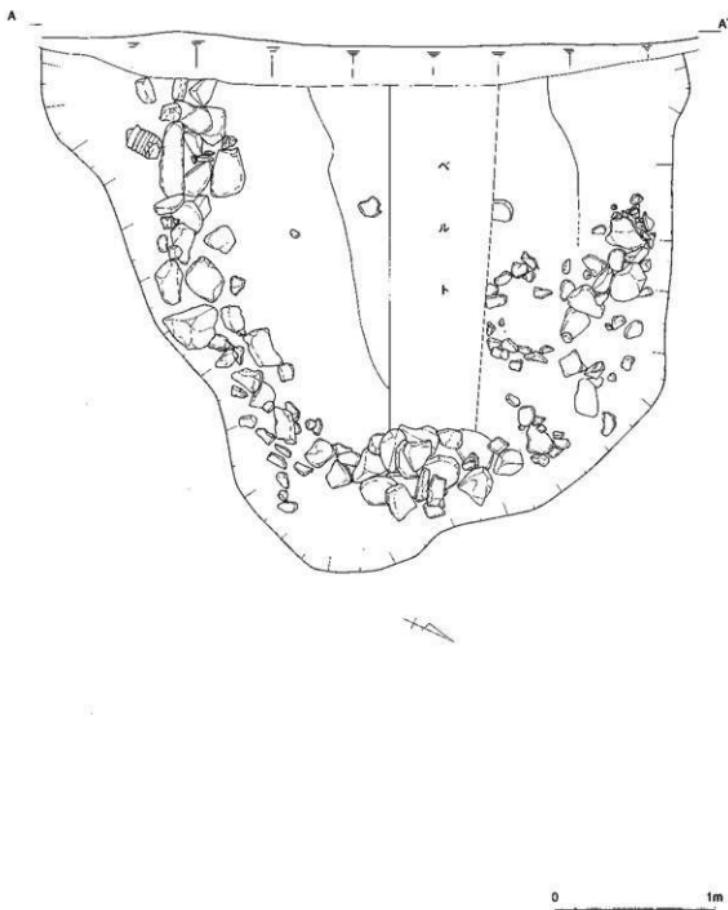
— B'



1. 表土
2. 暗褐色粘質土（青灰色土・黄褐色土ブロック含む）
3. 櫻褐色土（櫻褐色土粒子・炭化物多量含む）
4. 暗茶褐色土（3層よりやや明るめ）
5. 暗茶褐色土（黒褐色土及び櫻褐色土ブロックを多量、炭化物少量含む）
6. 暗茶褐色土（5層よりやや明るめ）
7. 暗茶褐色土（大きな櫻褐色土及び黒色土ブロック多量含む）
8. 暗茶褐色土（6層よりやや暗め、櫻褐色土粒子多量含む）
9. 暗茶褐色土（黒褐色土及び櫻褐色土粒子を多量、茶褐色土ブロック若干含む）
10. 櫻褐色土ブロック
11. 暗茶褐色土（黒褐色土及び櫻褐色土粒子を少量含む）
12. 暗茶褐色土（黒褐色土多量、櫻褐色土ブロック少量含む）
13. 茶褐色土（黒色土及び櫻褐色土粒子を多量含む）
14. 茶褐色土（櫻褐色土粒子・炭化物を少量含む）
15. 櫻褐色土（茶褐色土粒子を微量含む）
16. 櫻褐色土（15層よりやや砂質）

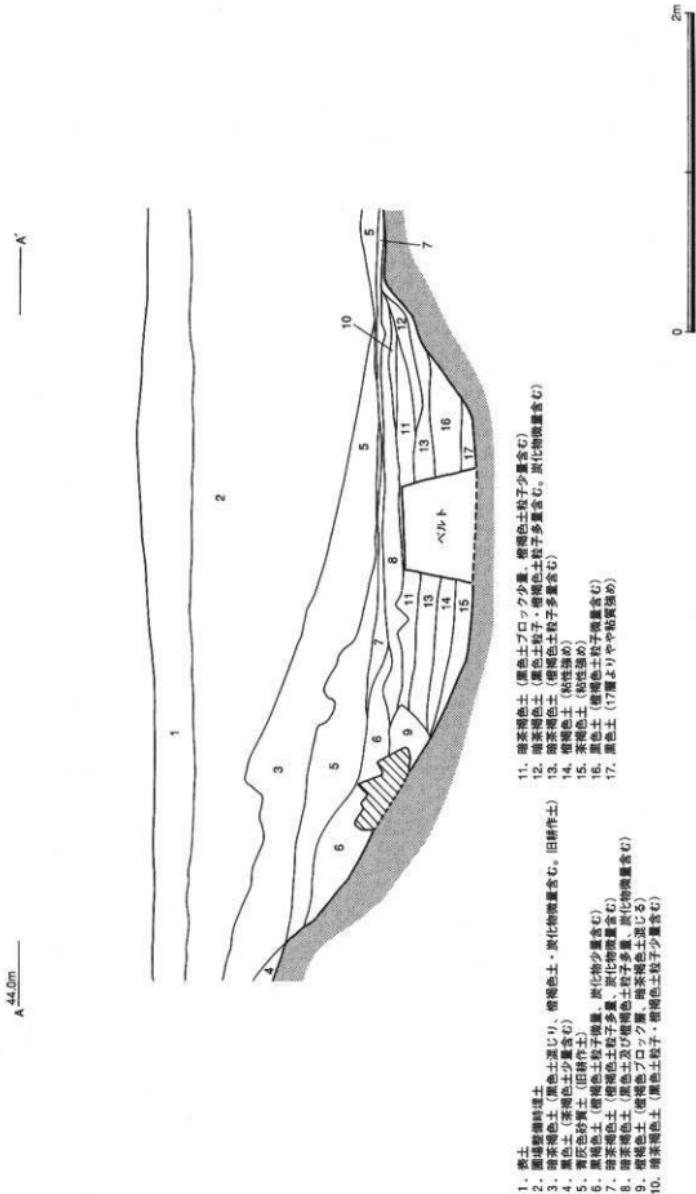
0 2m

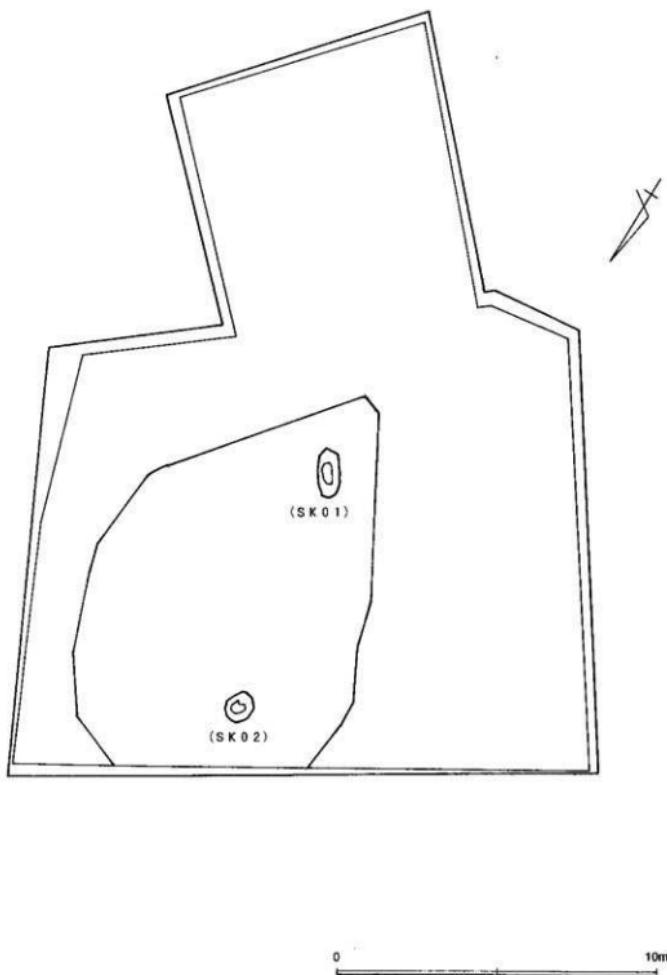
第9図 挖切2土層図 (S=1/40)



第10図 III区貼石土壤平面図 ($S = 1/30$)

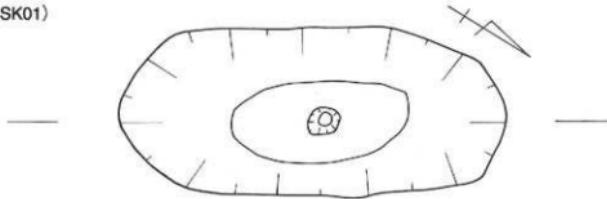
第11図 Ⅲ区粘土層土層図 ($S = 1/30$)



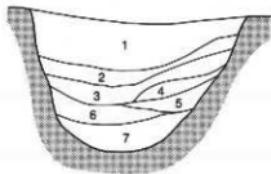
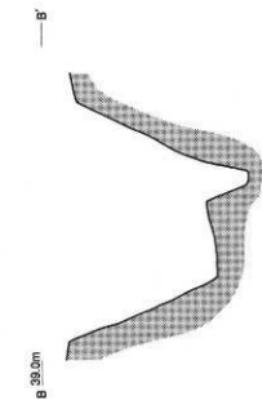
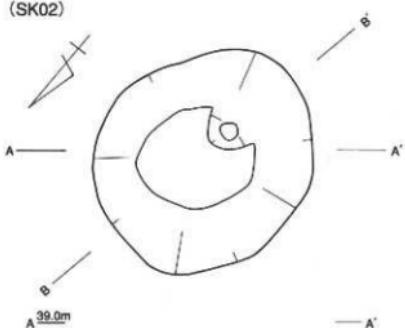


第12図 II区遺構平面図 ($S=1/150$)

(SK01)



(SK02)

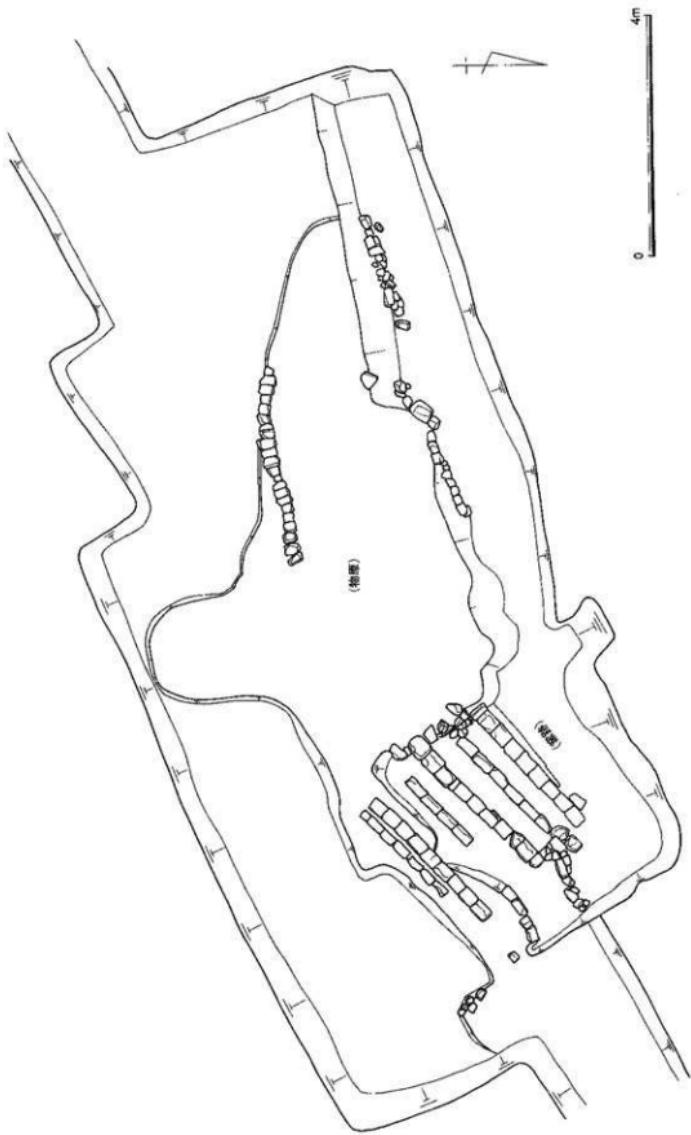


1. 黒色砂質土〔炭化物微量含む、焼文土器片出土〕
2. 茶褐色砂質土
3. 褐褐色砂質土〔褐色砂粒含む〕
4. 黒色砂質土
5. 黒色砂質土〔褐色砂粒子含む〕
6. 黒色砂質土
7. 黒色砂質土〔褐色砂粒子少量含む。やや粘質〕

0 1m

第13図 II区SK01・SK02実測図 (S=1/20)

第14図 IV区墓地実測図 ($S=1/80$)



第IV章 出土遺物

1. I 区出土遺物

1～27は土師質土器皿である。1～3はロクロ成形のもので、底部には回転糸切り痕が残る。1は溝状遺構2の溝内から出土。2・3は溝状遺構4付近の遺構面から出土した。

4～27は手捏ね成形の、いわゆる京都系土師質土器皿である。口径から9cm前後、11cm前後、15cm前後、19cm前後のものの4種類がある。口径9cm程度の器種には灯明皿として使用されたため口縁部にタールが付着しているもの（23～25）も見受けられる。

また、口径を問わず、内面のナデアゲ痕が明顯に残るものもある。

28～32は中国製青花皿である。いずれも小野正敏氏の編年でいう染付皿B1群に属するものである。28は見込部分の破片で、内底面に玉取獅子の図柄が描かれている。二次的な被熱により表面が荒れている。高台内は無釉である。29は口径12.2cm、底径6.5cm、器高2.4cmを測り、口縁内側に一条界線、内底面には渾んだ二重界線の内側に玉取獅子の図柄が描かれている。30は底径6cmを測り、内底面に二重界線と十字花文もしくは草花文が描かれており、二次の被熱により器表面が荒れてい。31は口径10cmを測り、口縁内面と内底面に界線が描かれている。32は口径11.8cm、底径6cm、器高2.8cmを測る。内側には口縁に一条界線、内底面には二重界線と玉取獅子が描かれている。外側には口縁部の一条界線と高台の二重界線の間の胴部に牡丹草文が描かれている。

33～38は白磁である。33はいわゆる木瓜皿の一種とみられる。器高は1.9cmを測るが、口径と底径は不明である。高台内面には染付で「福□（寿？）」と書かれている。34・35は小坏で、34は口径7cm、35は底径3cmを測る。36は癒の肩部とみられるもので、内面は無釉である。37・38は端反皿で、森田勉氏の編年でいう白磁E群、小野編年白磁皿C群に属する。37は口径11.2cmで、口縁部に若干の段が付く。38は口径17.4cmを測る。

39～42は青磁碗である。口径は39が12.6cm、40が13.6cm、41が15.6cmを測る。42は底部の破片であるため口径は不明であるが、底径は4.8cmを測る。高台外周まで釉がかかり、疊付から高台内にかけては無釉である。これらはいずれも外面に線描きにより蓮弁が表現されている。蓮弁の幅は39・40・42が1cm程度で、41は5mm程度である。39のみ蓮弁先端部は表現がされていない。

43は中国製大日茶碗の破片である、内面及び外周まで鉄輪がかかる。

44は產地・器種ともに不明。胎土からみて備前系陶器の可能性もある。図では蓋のつまみのように表現したが、鉢などの脚部の可能性もある。

45は褐釉陶器鉢である。口径は28.2cmを測る。口縁部を内外に折り曲げており、断面形はT字状を呈する。

46、47は李朝系陶器の徳利とみられる。46は首から肩にかけての破片で、内外面に暗緑色の釉がかかる。47は底部付近の破片で、外面は底部まで釉がかかっている。内面は破片上端付近に釉がかかっているのみである。

48～51は瀬戸美濃系陶器。48は中国製青磁碗を模倣したもので、口径11cmを測る。内外面に透明感のある灰緑色の釉がかかり、外面には幅5mm程度の線描き蓮弁文が描かれている。49・50は天目

茶碗。49は口径12.6cmで、外面下半で釉が途切れている。50は口径9.6cmである。51は器種不明、天日茶碗の可能性もある。内面に茶褐色の鉄釉がかかる。

52~62は備前系陶器。52は口径8.4cmの壺で、二次的に被熱しており内面の剥離が著しい。53は口径17.8cmの壺の口縁部である。54は口径28cmを測る壺の口縁部である。形状と口径の大きさから、水屋甕の破片とみられる。55は壺の底部。底径18.2cmを測る。56は水屋甕の胴部。胴部最大径よりやや下に断面三角形の突帯を貼り付けている。57・58は水屋甕の取手部分の破片。59は水屋甕の底部の可能性があるので、底径は22.6cmで、底部周縁には高さ1cmの脚が付く。水屋甕は各部の特徴から北野隆亮氏編年のI b期にあたるとみられる。60~62は甕の破片。60・61はともに口縁部で、口径は60~45cm、61が44.6cmを測る。62は底部の破片で、底径は39.6cmを測る。甕は口縁部の形態から、問屋忠彦氏編年のIV B期。乗岡実氏編年の中世5期の範疇に入る。

63は器種、時期とも不明の土器底部である。内面にはヘラ削りの痕が明瞭に残り、底部は平底。胎上は砂粒を多く含む。

64は肥前系陶器碗。口径は13.4cm、口縁外面に一条の沈線を施す。全体に暗緑灰色の釉がかかっている。

65・66は上鍤である。65は長さ4.4cm、幅1cmで、穴の幅は3mmを測る。66は長さ4.8cm、幅1cm、穴の幅2mmを測る。

67・68は鉄器である。67は鉄釘で、断面形は正方形を呈する。長さ10.9cm、頭部幅1.6cmを測る。68はやや反った形状を示すもので、刀身の断片と推測される。現存長17.2cm、幅2.7cm、厚さ4mmを測る。

69・70は青銅製品。69は釣り針状の架け金具で、上下の長さ2.7cm、厚さ2mmを測る。70は用途不明の輪状金具で、上下の長さ2.3cm、厚さ2mmを測る。

71は石臼。二次的に被熱しており全体的に赤く変色している。摺り目はおよそ5~8mm程度の間隔で彫られている。石材は不明である。

72はI~2区出土の青磁大皿、底径11.6cmを測る。

2. III区出土遺物

74~84はIII区からの出土品である。73~75は堀切2からの出土で、73は褐釉陶器壺の底部で底径11.2cmを測る。74は水屋甕の口縁から肩にかけての破片。口径は30.6cmを測る。75は瀬戸美濃灰釉皿。口径11.0cm、底径6.2cm、器高3.4cmを測る。瀬戸大窯I期のものである。76~82は石組み土壤内からの出土。76は瀬戸美濃天日茶碗。口径は12.2cm。77は青花小皿。口径6.8cm、底径3.2cm、器高1.8cmで底部は碁笥底になっており、内底面には二重界線と十字花文を描く。小野編年C群に属する。78・79は褐釉陶器壺の破片。同一個体の可能性がある。80は瓦質土器鉢の破片。外面は回転ナデ調整され、内面にはハケメが見られる。81は来待石製宝篋印塔の相輪部。上半部が欠損しており、現高では25.3cm、直径は15cmを測る。82は茶臼の受け部の破片。上部表面の剥離が著しい。石材は不明である。

83と84は遺構に直接伴わないもの。83は龍泉窯系青磁碗で外面上に螭蓮弁文を陽刻する。84は玉髓製の石匙である。

3. II区出土遺物

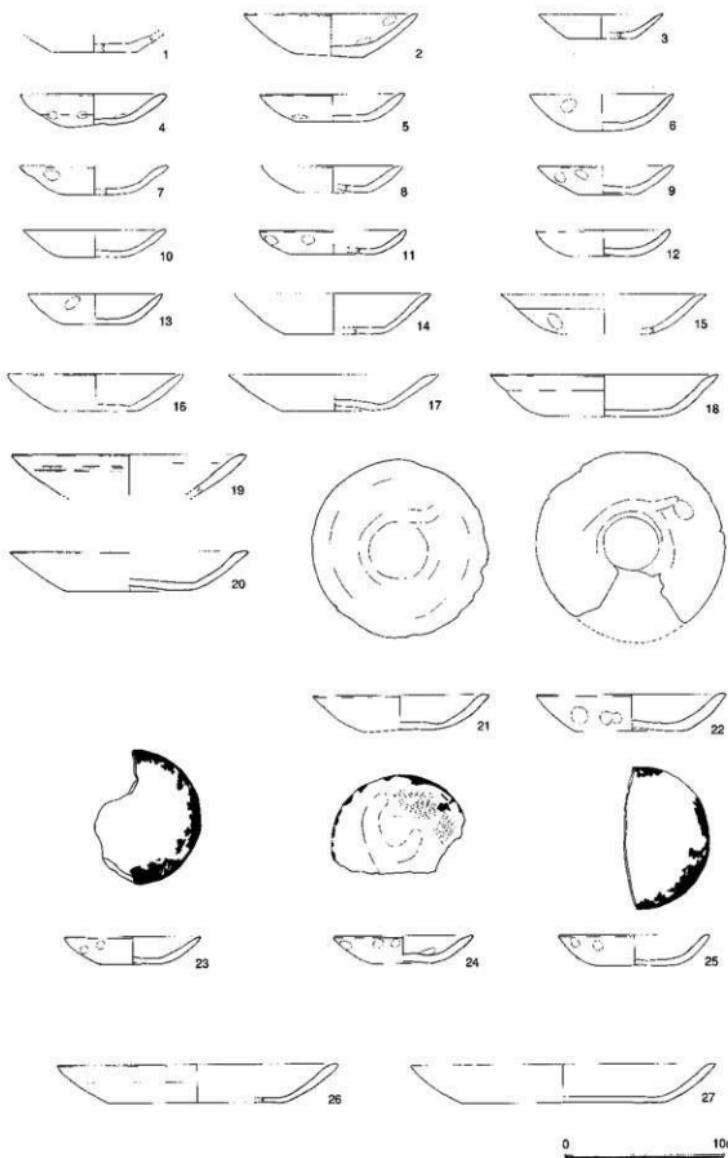
縄文土器はいずれも縄文時代後期のものである。口縁端部及び体部に縄文を施した深鉢は四元式並行のものが多く見られるが、中津式の深鉢（122）とみられるものも存在する。器種は無文の深鉢（101～106）、口縁及び胴部に縄文を施すもの（85～98・111～117・119～121・123）浅鉢（100）、注口土器（99）などがみられる。

石器は縄文土器とともに6点出土している。124～127は玄武岩製の打製石斧。124は長さ9cm、最大幅4.9cm、厚さ1.4cmを測る。125は長さ11.3cm、最大幅5.3cm、厚さ2.3cmを測る。126は上部が欠損しており、長さは不明であるが、最大幅6.1cm、厚さ1.1cmを測る。127は欠損著しいが分銅型の石斧か？厚さは1cmを測る。128は珪化木の剥片の縁辺を刃部に加工しているものである。長さ7.5cm、幅6cm、厚さ1.6cmを測る。129は安山岩製の石鎌である。長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ3mmを測る。

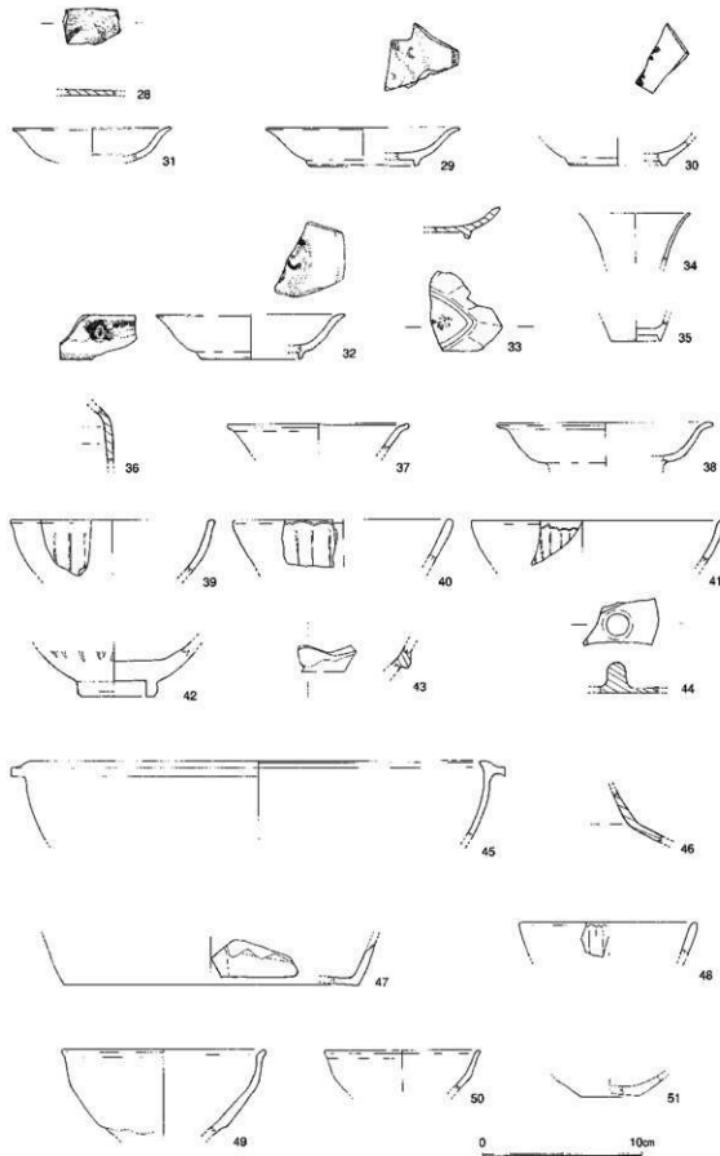
130～134はII区の縄文土器群が出土した調査区と道を挟んで南側の谷部から出土した。
130は古式土師器壺の頸部、131は土師器高坏の脚部で、底径10.8cmを測る。132は土師器壺または低脚壺で、ツマミ状の部分は径4.3cmを測る。133は白磁皿の底部。内外面には貫入の多い乳白色の釉がかかり、高台部は無釉である。底径は5cmを測る。134は土師器高坏の脚部である。
135～137はII区の南東水田部からの出土。いずれも中世須恵器とみられる。135は壺とみられるもので、底径は8.4cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。136は壺の底部の破片底径17.6cmを測る。137は壺鉢の口縁部。口径は31.8cmで下縁状の口縁部を持つ。

参考文献

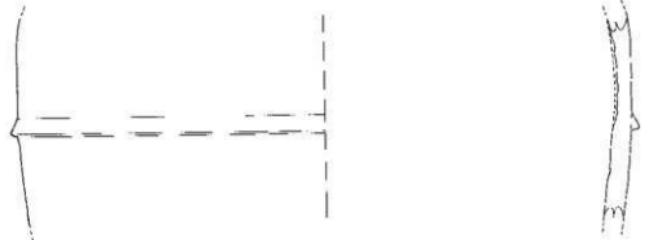
- ・小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・森田 勘「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・北野隆亮「備前焼水屋壺の分類と変遷－根来寺坊院跡出土資料を中心として－」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会 桂書房 2006
- ・間壁忠彦「備前焼」考古学ライブライマー60 ニューサイエンス社 1991
- ・秉岡 実「中世の備前焼壺（壺）の編年案」『第2回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会 2000
- ・柳浦俊一「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『鳥根考古学会誌第17集』 鳥根考古学会 2000
- ・井上喜久男「近世の瀬戸・美濃」『東洋陶磁史－その研究の現在－』 東洋陶磁学会 2002



第15図 I-1区出土遺物実測図(1) ($S = 1/3$)

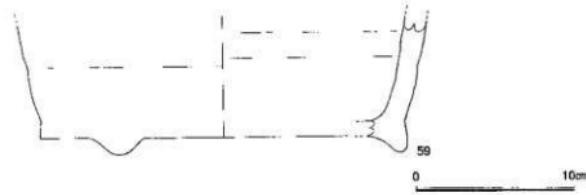


第16図 I-1区出土遺物実測図(2) (S=1/3)

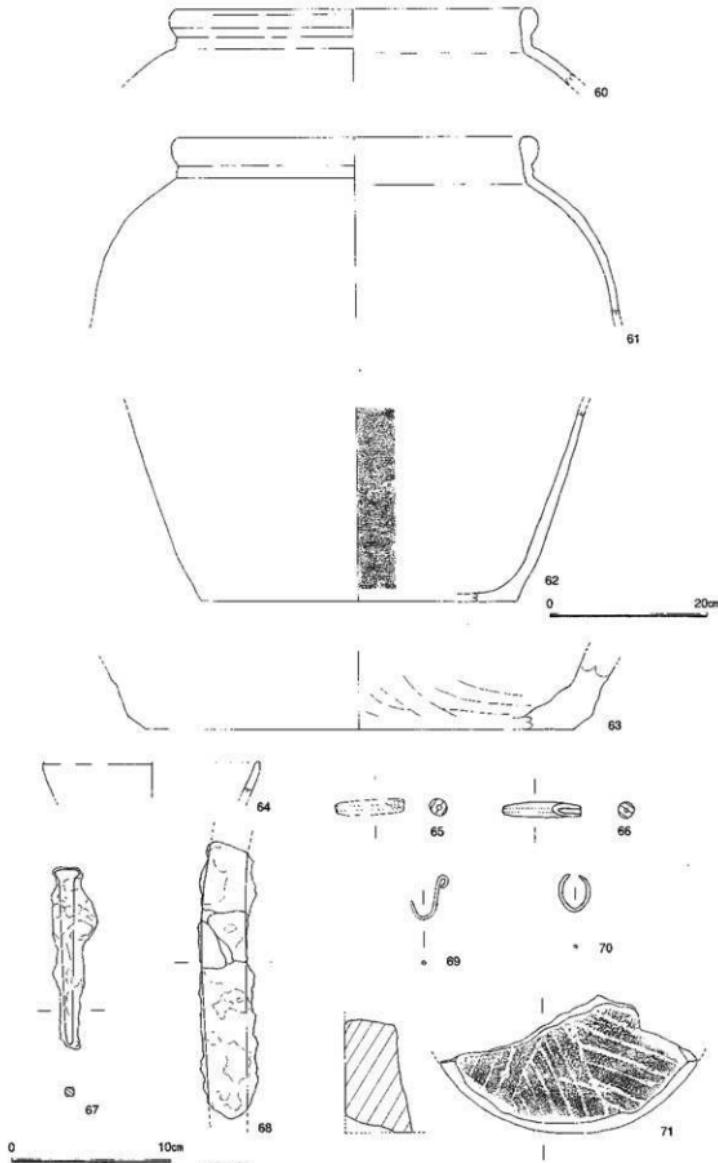


57

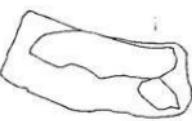
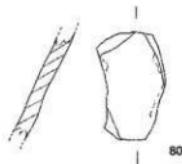
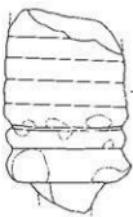
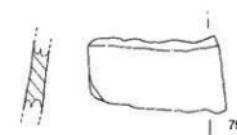
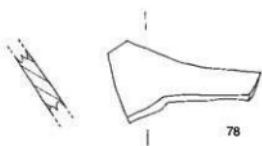
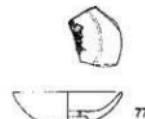
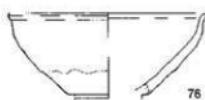
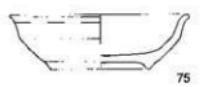
58



第17図 I-1区出土遺物実測図(3) (S=1/3)



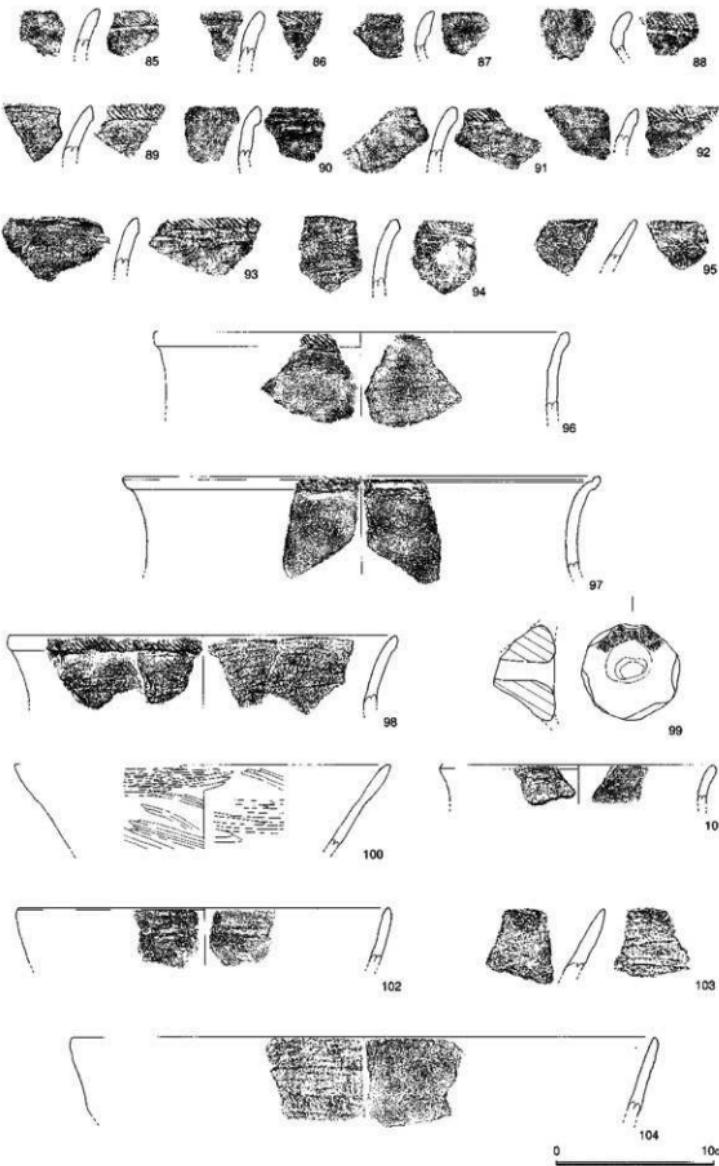
第18図 I-1区出土遺物実測図(4) (60~62はS=1/6、他はS=1/3)



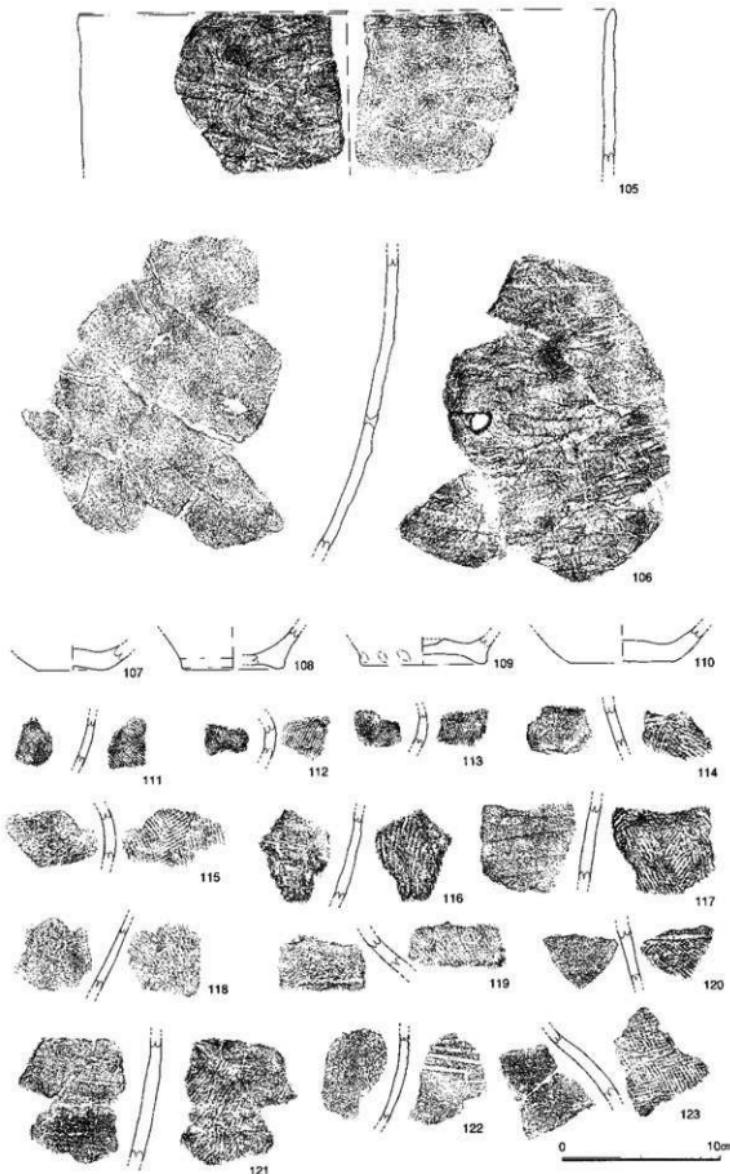
0 20cm

0 10cm

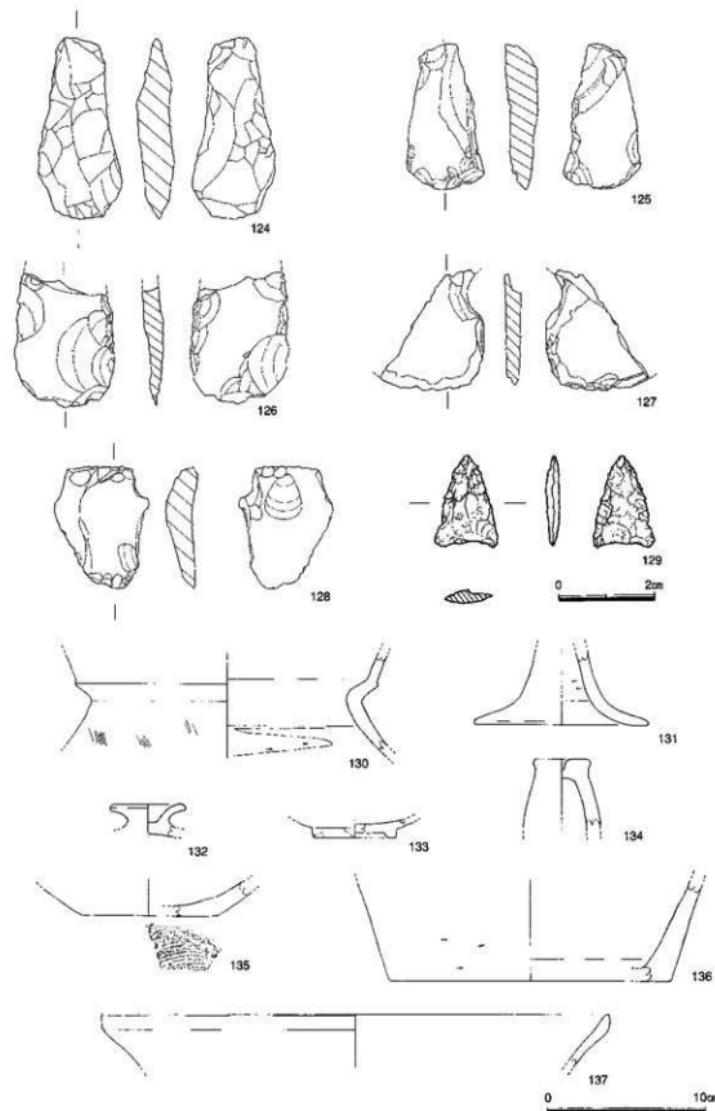
第19図 I-2区、III区出土遺物実測図 (S=1/3、81はS=1/6)



第20図 II区出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第21図 II区出土遺物実測図(2) ($S=1/3$)



第22図 II区出土遺物実測図（3）（124～134）その他の遺物実測図（135～137）
(S=1/3、129は等倍)

表2 土居成跡 土器・陶磁器類収表

図版	種類・器形	出土位置(層位)	口径	底径	高さ	特徴	生産地	備考
1	土師質土器皿	I-1区溝状層位2		5.4cm		底部凹凸切		
2	土師質土器皿	I-1区	10.8cm	4.1cm	2.7cm	底部凹凸切		
3	土師質土器皿	I-1区	7.8cm	4.0cm	1.5cm	底部凹凸切		
4	土師質土器皿	I-1区	9.2cm	4.2cm	2.0cm	見込・底部に黒斑	京都系	
5	土師質土器皿	I-1区		2.7cm	9.0cm		京都系	
6	土師質土器皿	I-1区		9.0cm	3.0cm	2.3cm	京都系	
7	土師質土器皿	I-1区		9.4cm	3.6cm	1.8cm	京都系	
8	土師質土器皿	I-1区		8.8cm	4.4cm	1.7cm	京都系	
9	土師質土器皿	I-1区		9.0cm	4.1cm	2.8cm	京都系	
10	土師質土器皿	I-1区北		9.0cm	4.0cm	1.7cm	京都系	
11	土師質土器皿	I-1区建物1北側		9.0cm	5.0cm	2.5cm	京都系	
12	土師質土器皿	I-1区北		8.2cm	4.0cm	1.6cm	京都系	
13	土師質土器皿	I-1区		8.2cm	4.0cm	1.9cm	京都系	
14	土師質土器皿	I-1区	12.2cm	6.0cm	2.5cm	見込・底部に黒斑	京都系	
15	土師質土器皿	I-1区	12.8cm	6.0cm	2.5cm	見込・底部に黒斑	京都系	
16	土師質土器皿	I-1区	11.0cm	5.2cm	2.3cm	見込・底部に黒斑	京都系	
17	土師質土器皿	I-1区	13.1cm	6.5cm	2.3cm	見込・底部に黒斑	京都系	
18	土師質土器皿	I-1区建物1北側	14.0cm	7.8cm	2.6cm	見込・底部に黒斑	京都系	
19	土師質土器皿	I-1区	14.6cm	7.0cm	2.5cm	見込・底部に黒斑	京都系	
20	土師質土器皿	I-1区	15.0cm	8.0cm	2.5cm	見込・底部に黒斑	京都系	
21	土師質土器皿	I-1区	11.1cm	4.0cm	2.3cm		京都系	
22	土師質土器皿	I-1区	11.8cm	6.8cm	2.3cm		京都系	
23	土師質土器皿	I-1区		8.4cm	3.7cm		京都系	
24	土師質土器皿	I-1区		8.8cm	3.8cm	1.7cm	京都系	
25	土師質土器皿	I-1区		9.4cm	4.5cm	1.9cm	京都系	
26	土師質土器皿	I-1区		17.4cm	11.0cm	2.4cm	京都系	
27	土師質土器皿	I-1区		19.2cm	12.8cm	2.4cm	京都系	
28	青花皿	I-1区				見込に墨取模子、二次の被跡	中国	小野川群
29	青花皿	I-1区	12.2cm	6.0cm	2.4cm	見込に墨取模子	中国	小野川群
30	青花皿	I-1区北		6.0cm		見込に十字墨文もしくは草花文	中国	小野川群
31	青花皿	I-1区		10.0cm		口縁部と見込に界線	中国	小野川群
32	青花皿	I-1区		11.8cm	6.0cm	2.8cm 見込に墨取模子、外腹にアラベスク	中国	小野川群
33	白磁皿	I-1区			1.8cm	木皿底、高台内に「福」(赤?)	中国	
34	白磁小杯	I-1区		7.0cm			中国	森田E群
35	白磁小杯	I-1区北		3.0cm			中国	森田E群
36	白磁蓋	I-1区北				内面無施	中国	
37	白磁皿	I-1区北		11.2cm			中国	森田E群
38	白磁皿	I-1区北		17.4cm			中国	森田E群
39	青磁碗	I-1区		12.0cm		裏面の青磁のない縁焼き蓮弁文	中国	上田B群
40	青磁碗	I-1区		13.6cm		縁焼き蓮弁文	中国	上田B群
41	青磁碗	I-1区西		15.0cm		縁焼き蓮弁文	中国	上田B群
42	青磁碗	I-1区		4.8cm		縁焼き蓮弁文、高台内・蔓付施釉	中国	上田B群
43	天目茶碗	I-1区西				ガラス質の黒色施釉が厚くかかる	中国	
44	陶器蓋	I-1区西				つまみ状の突起がついてる	中国?	機能の可能性あり
45	陶器陶器	I-1区	20.2cm				中国?	
46	陶器陶器	I-1区				タカラ成形	朝前	
47	陶器陶器	I-1区				底部内面には施釉	中国or新鋭	株の可能性あり
48	陶器陶器	I-1区				縁焼き蓮弁文	瀬戸美濃	
49	天目茶碗	I-1区	12.6cm			外面部膨らみ施釉	瀬戸美濃	
50	天目茶碗	I-1区建物1北	9.6cm				瀬戸美濃	
51	美輪陶器	I-1区建物1北		3.6cm		内面のみ施釉を施す。底部へり切り	瀬戸美濃	天目茶碗?
52	陶器茶碗	I-1区				二次的被跡を受け内面が剥離	朝前	
53	陶器茶碗	I-1区		5.4cm			朝前	水盤裏か?(北野1b期)
54	陶器茶碗	I-1区		17.8cm			朝前	水盤裏か?(北野1b期)
55	陶器茶碗	I-1区		28.0cm			朝前	
56	陶器茶碗	I-1区		18.2cm			朝前	
57	陶器双耳壺(水屋裏)	I-1区				側面に突脊、二次的被熱	朝前	北野1b期
58	陶器双耳壺(水屋裏)	I-1区				縁状の紐かけ取手	朝前	北野1b期
59	陶器双耳壺(水屋裏)	I-1区				紐状の紐かけ取手	朝前	北野1b期
60	陶器双耳壺?	I-1区		22.6cm		側面に脚が付く	朝前	水盤裏か?
61	陶器茶碗	I-1区		45.0cm		やや歪めた玉縁口縫	朝前	開智IV群、無田中世6群
62	陶器茶碗	I-1区		44.6cm		やや歪めた玉縁口縫	朝前	開智IV群、樂田中世6群
63	陶器茶碗	I-1区		39.6cm			朝前	
64	土師質度?	I-1区		26.8cm		内面はヘラケツリ痕が頗著	不明	
65	底袖陶器	I-1区		13.4cm		内外面に墨色の施	肥前系	唐矛
72	青磁皿	I-2区		11.6cm			中国	
73	青磁陶器	區区建物2		11.2cm			中国	
74	青磁茶碗	區区建物2		30.6cm			朝前	水盤裏か?(北野1b期)
75	灰釉陶器皿	區区建物2	11.0cm	6.2cm	3.4cm	底部内面に目跡	瀬戸美濃	大富1期
76	灰釉陶器皿	區区粘土土壙		12.2cm		天目茶碗	瀬戸美濃	
77	灰付盆	區区粘土土壙		6.8cm	3.2cm	見込に界線と十子花文、底部著色	中国	小野川群
78	灰釉陶器皿	區区粘土土壙					中国	
79	灰釉陶器皿	區区粘土土壙					中国	
80	瓦質土器皿	區区粘土土壙					中国	
82	青磁碗	區区				外面に墨取模子	中国	龍泉窯青磁碗

	出土位置(層位)	口径	底径	高さ	特徴	生産地	備考
85 圓文土器深鉢	E区				口縁部のみ網文を施す		
86 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
87 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
88 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
89 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
90 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
91 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
92 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
93 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
94 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
95 圓文土器深鉢	E区				縦堆部のみ網文を施す		
96 圓文土器深鉢	E区	25.8cm			口縁部のみ網文を施す		
97 圓文土器深鉢	E区	29.6cm			縦内窓に浅縞		
98 圓文土器深鉢	E区	24.0cm			縦堆部のみ網文を施す		
99 圓文土器深鉢	E区				穴の径は1cm		
100 圓文土器深鉢	E区	23.4cm			内外面ともにヘラガキ		
101 圓文土器深鉢	E区	17.0cm					
102 圓文土器深鉢	E区	23.2cm					
103 圓文土器深鉢	E区						
104 圓文土器深鉢	E区	36.8cm					
105 圓文土器深鉢	E区	33.4cm					
106 圓文土器深鉢	E区				底部に窪み2mmの舟形あり		
107 圓文土器深鉢	E区	4.4cm					
108 圓文土器深鉢	E区			6.0cm			
109 圓文土器深鉢	E区			7.8cm			
110 圓文土器深鉢	E区			10.8cm	外側に羽状の網文を施す		
111 圓文土器深鉢	E区						
112 圓文土器深鉢	E区						
113 圓文土器深鉢	E区				外側に羽状の網文を施す		
114 圓文土器深鉢	E区						
115 圓文土器深鉢	E区				外側に羽状の網文を施す		
116 圓文土器深鉢	E区						
117 圓文土器深鉢	E区				外側に羽状の網文を施す		
118 圓文土器深鉢	E区						
119 圓文土器深鉢	E区						
120 圓文土器深鉢	E区						
121 圓文土器深鉢	E区						
122 圓文土器深鉢	E区				磨消網文		
123 圓文土器深鉢	E区				外側に羽状の網文を施す		
130 圓文土器深鉢	E区				複合口縁		
131 土器最高部	E区			10.8cm	内面ヘラ削り		
132 土器最高部(保証件?)	E区						
133 土器最高部	E区			5.0cm	臺付から高台内にかけて無施		
134 土器最高部	E区				頂部中央に2mm4mm、深さ7mmの穴		
135 土器最高部	T37			6.4cm	底部凹凸有り		
136 土器最高部	T37			17.6cm			
137 土器最高部	T37			31.8cm	口縁はやや主縁状を呈する		

表3 土居成遺跡・金鳳製品・石製品・土質品観察表

図版	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
65 土器	E区貼石土器	4.4cm	1.0cm		縦約3mmの孔		
66 土器	E区貼石土器	4.8cm	1.0cm		縦約2mmの孔		
67 鋼製品	I-1区	10.9cm	1.6cm	1.0cm	前面正方形	鉄釘	
68 鋼製品	I-1区		2.7cm	4mm	やや反りがある	刀身?	
69 鋼製品	I-1区	2.7cm	2.3cm	2mm	鉄釘状		
70 鋼製品	I-1区	2.3cm	1.9cm	2mm	圓錐状		
71 石臼	I-1区				滑り目あり、二次的鉋	石材不明	
81 玉壁印押	區貼石土器	15.6cm			上半部欠損、相輪は二邊で表現	相輪部、米持石	
82 玉臼	區貼石土器				表面はよく研摩されている	受皿部分、石材不明	
84 石臼	區黑色土	3.5cm	3.4cm	6.5mm	上部周縁部を抉ってドマミを作る	玉質	
124 打製石斧	E区	9.0cm	4.9cm	1.4cm		玄武岩	
125 打製石斧	E区	11.3cm	5.3cm	2.3cm	上部欠損	玄武岩	
126 打製石斧	E区			8.1cm	1.1cm	玄武岩	
127 打製石斧	E区				1.0cm 側面に抉り	玄武岩	
128 石器	E区	7.5cm	6.0cm	1.6cm	剝片の縫合に継ぎを加え刃部とする	珪化木	
129 石器	E区	1.9cm	1.2cm	3mm		安山岩	

第V章 総括

1. 土居成遺跡の中世城館跡について

調査地である丘陵上には、切岡によれば「土居成」、「馬屋成」などといった地名が見受けられ、以前から武士の館跡であるとされてきた。「上居」とは元々は武士などの住む館の周間にめぐらせてある土壘（土手）の意味であるが、次第に転じて館全体を「土居」と呼称するようになった。また「成」は平場を指す言葉で、城郭の曲輪など平らな場所を指す言葉もある。

今回の発掘調査の結果、伝承通りに中世城館跡とみられる遺構群を丘陵のほぼ全域から検出した。

館の敷地内には少なくとも2条の堀切を設けており、それぞれの堀切によって区画された内郭部分に遺構の集中が顕著である。特にI-1区にはかなりの数の遺構が集中しており、礎石建物跡をはじめとする数棟の建物跡の他、多数のピットや溝状遺構、大小の土壙が検出された。しかし各遺構間のセット関係や新旧関係については、ほとんどの遺構について内部の発掘を行わなかったこともあり不明な部分が多く、また遺構の重複も激しいため、見つけられなかつたピットもあるとみられ、建物に復元できなかつたピット列も、今後調査が進めば建物に復元できるものもあると考える。

遺物は溝状遺構1の覆土上面及び周辺の道構面上から集中的に出土している。主に接待や儀式など「ハレ」の席で使用される京都系上部質土器皿（カワラケ）の出土が顕著であり、他には中国や瀬戸美濃の天目茶碗、中国製褐釉陶器壺、備前系陶器の双耳壺（水原壺）など茶陶として使用されたものや、中国白磁の木瓜皿など、高級陶磁器類が主流であることから、この区域は儀式や来客接待などを行う「ハレ」の空間であった可能性もある。

また、Ⅲ区で検出した貼石土壙の内部及びその周辺でも、備前の双耳壺や瀬戸美濃天目茶碗、中国製褐釉陶器、茶臼など、茶の湯に関係する遺物が集中的に出土しており、貼石土壙そのものの性格と共に今後も館内の空間構造について検討していく必要があろう。

これに対して、堀切1に開まれた南側区域については、区域内の東半部に集中して建物跡とピット群を検出した。遺物はほとんど出土しなかつたため不明な部分が多いが、遺跡中で最高所に位置する区域であり、主郭的な空間と考えられることから、ここに館の主の居住空間があったと推定される。

礎石建物である建物1は、床面から遺物がごく少量しか出土しなかつたため、建物の性格ははつきりしないが、遺構の特徴としては区画Aの南東隅床面が著しく被熱していることが注目される。この建物跡の周辺からは、刀の一部とみられるものの他、大小の鉄釘や、鉄塊状の遺物が出土していることから、鍛冶工房であった可能性もある。建物1と同様に礎石間に砾を敷いて壁の基礎としている例は、島根県内では益田市七尾城跡二の段西下帯曲輪検出の構跡がある。⁽¹⁾

中世居館は山城の山麓部に造られることが多い。本遺跡の南の山上には寺山城跡が存在することから、土居成遺跡は寺山城に関連した城館である可能性も考慮すべきであろう。

2. 出土陶磁器からみた土居成城館の年代

本遺跡からは、土師質土器皿に加え、備前、瀬戸美濃などの国産陶器、青花・白磁・青磁・褐釉陶器などの中国製品や李朝（朝鮮）系陶器が出土している。

京都系土師質土器は、富田城跡や富田川河床遺跡で多く出土するものは厚手で成形が難であるのに較べて、土居成跡出土品は器壁が薄く成形も良いものである。土居成と同形のものは富田城跡本丸出土のものがあるが、これは当地域で出土する京都系土師質土器皿の中でも初期のものではないかとされている。⁽²⁾ しかしこの地域で出土する土師質土器は現在でもまだ編年が確立されておらず、その年代については今後も検討が必要である。

土師質土器と較べ、陶磁器類は今までに各地の窯跡などの生産地遺跡や、消費地である日本各地の都市遺跡や城館遺跡などの調査・研究によって、年代ごとの器種変遷がほぼ確立されつつある。そのためここでは陶磁器の編年を物差しとして土居成遺跡の城館跡の年代について考察していくこととする。

まず備前系陶器であるが、造構面から出土した壺類は、口縁部の形状からみて、間壁編年IV B期（15世紀代）、乗岡編年で中世5期（15世紀後半）の範疇に収まるものである。

また、今回の調査では備前系陶器の双耳壺（水屋壺）も出土しているが、これは北野編年でI b期（15世紀後半頃）に当たる特徴を持っている。

瀬戸美濃系陶器は天日茶碗と灰釉端反皿が少量出土している。この内、端反皿は大窯1期（15世紀末～16世紀初頭）のものである。

中国青花は小野編年の皿B1群と皿C群、碗C群とD群のみが出土しており、これらの形式に当たる年代としては15世紀後半～16世紀前半である。

白磁は主として端反皿が出土している。森田編年E群に属するもので年代的には15世紀後半～16世紀代に亘って広く使用されるものである。

青磁は碗、皿が出土しているが、形式的にある程度判別できる器種は碗のみである。

碗はすべて龍泉窯系のもので、外面に蓮弁文が施されているものである。これらはⅢ区で出土した比較的時代の古い鎌倉弁文碗1点を除いて、すべて線描きにより蓮弁が表現されたものである。蓮弁の幅は約1cmと広いものから約3mmと狭いものがあり、これらは概ね15世紀後半～16世紀代の範疇に収まるものである。

以上のことから、土居成出土陶磁器の年代は15世紀後半～16世紀代の時期に収まるものであることが理解できる。さらにいえば、16世紀から現れ、富田城跡では数多く出土する間壁編年V期（乗岡中世6期）の備前系陶器が土居成からは全く出土せず、間壁IV期（乗岡中世5期）のみであることや、上記の陶磁器群全体が揃って使用される年代が15世紀後半～16世紀初頭頃までであることから、土居成遺跡の城館もこの時期を中心とするものと言えるだろう。

3. おわりに

以上のように、土居成遺跡で発見した中世遺構は15世紀後半～16世紀初頭頃の城館跡であると判断した。遺跡の規模の大きさに加え、出土品も京都系土師質土器皿、茶器類などの高級陶磁器が出

士することから、経済力・社会的地位共に高い人物がここで生活していたものと考えられる。

当時のこの地域は、室町幕府の後継者争いに端を発し、京都を中心に日本全国に戦乱の波が押し寄せた応仁・文明の乱のさなか、出雲守護京極氏の守護代として、富田城を居城に出雲国内の国人勢力などと抗争を繰り広げ、その後戦国大名として独立し勢力を拡大していった出雲尼子氏の本拠地であることから、土居成遺跡の城館の主は尼子氏と繋がりの深い人物であった可能性が高い。

安来市内においては、現在までに富田城跡を始め塩谷、新宮谷、苔谷といった富田城跡関連遺跡群を中心に武士の居館跡が発掘調査されているが、土居成遺跡の城館跡のように大規模で、なおかつ周囲に堀切をめぐらせているものは前例がない。

また出土遺物の年代も富田城跡の城館跡においては16世紀代のものが中心であるのに対し、土居成遺跡の出土品は15世紀後半のものが中心であり、やや古相を示している。

当地域では富田城跡で若干の遺物の出土がみられる他は、明確に15世紀代までさかのばる城館遺跡はほとんど知られていないこともあり、土居成遺跡は地域の中世史を探る上で重要な事例であると言えよう。

(注)

- (1) 『七尾城跡・三宅御土居跡－益田氏関連遺跡群発掘調査報告書－』 1998 益田市教育委員会
- (2) 中井淳史「土師器生産体制変容の一鈎－中世末期の出雲東部地域を中心に－」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』 中世土器研究会 2001

寺山城踏査記

今岡 稔（島根県文化財保護指導委員）

1. はじめに

上居成遺跡が発掘され、現地説明会などで紹介されたので寺井 穀氏と寺山城の踏査を行った。山麓台地上の建物群である上居成遺跡とその背後を守る寺山城という関係が確認できるのではないかと期待したものである。

二度の踏査結果は添付図のとおりだが、二度目の踏査で岡東側の丘陵（ピーク1025m）部に城跡らしい造構が見つけられなかったので、当初、想定した山麓の館跡と山上の城という単純な図式はあてはまらないようだ。

今回の踏査結果から、二つの可能性を考えている。一つは、建物群が「上居成」の台地上で終わらず、さらに西側にも展開している可能性である。もう一つは、寺山城が岡の範囲で終わらずに、さらに南側につながり、以前に発見した独松山城砦跡群と連続する可能性である。以下、それぞれの考えについて簡単に説明したい。

2. 山麓の建物群とその背後を守る城

『石見の城館跡』（1997年島根県教育委員会）で「吉永陣屋跡」（寺井 穀氏原図）として紹介されている加藤氏の城である。豊臣秀吉の時期に活躍した加藤嘉明が有名である。1643年から1682年まで使用されたもので、近世の城館ということになるが、会津若松42万石から1万石に減封され石垣と天守閣の城がつくれなくなつたため、石垣以前の中世小規模城館の形を復活させ構築したものと解釈できる。背後の丘陵をU字形に削り込んで、その中に主要な建物群が配置される。

『出雲・隠岐の城館』（1998年島根県教育委員会）では「智伊館跡」（今岡原図）をそのような城館跡の典型的な例として紹介している。

U字形の城郭とその中に守られる建物群という図式を寺山城と土居成遺跡にあてはめれば、寺山城の東に続く丘陵にも城らしい加工があるべきだと思うのだが、見られなかった。

3. 「土居成」のさらに西側に続く城館

富田八幡宮が土居成遺跡対岸にある。その境内を、城跡を踏査するつもりで歩いてみれば、嚴重に防衛された前線司令部の様相を呈していることが見て取れる。途中が運動公園のために分断されているが『出雲・隠岐の城館跡』で紹介（寺井原図）された三笠山城跡に続いている。富田川をはさんで対峙していたとすれば、土居成遺跡もそれなりに現在確認されたより広範囲に広がる可能性がある。富田八幡宮境内や三笠山城跡に残る遺構とくらべると見劣りがするが寺山城もこのような状況を想定すれば一応、理解できる。

4. 独松山城砦跡群

安来平野南に分布する城砦が尾根伝いに高盛山、独松山と続き月山富田城の東側を守る城砦群となっている。『出雲・隱岐の城館』分布調査の際に発見したのである。独松山より西側は未踏査で、地形からは寺山城へ続く可能性がある。その末端に土居成遺跡が存在することになる。雄大すぎる防衛構想のような気もするが、本城である月山富田城にも松江の真山・白鹿城砦群にも同様な構想が見られ、それなりに有効であったことは、真山・白鹿城砦群が最後には落城したとはいえ毛利軍に頑強に抵抗した様子が文書・記録や周辺に残る毛利方の城砦群から知られるので、尼子氏の城の特徴の一つとしてあげてよいものだろう。

5. おわりに

独松山城砦跡群の項でも説明したように、月山富田城周辺でも未踏査の部分がたくさん残っている。土居成遺跡と寺山城との関係についても、上記のような仮説を考慮しながら、さらに踏査を統ることで、もう少し確実なことがいえるようになるかと思う。

末筆になったが、踏査の最初に土居成遺跡の近くに居住される朝木氏に寺山城の登り口まで案内していただくなどお世話になった。記して感謝の気持ちを表したい。

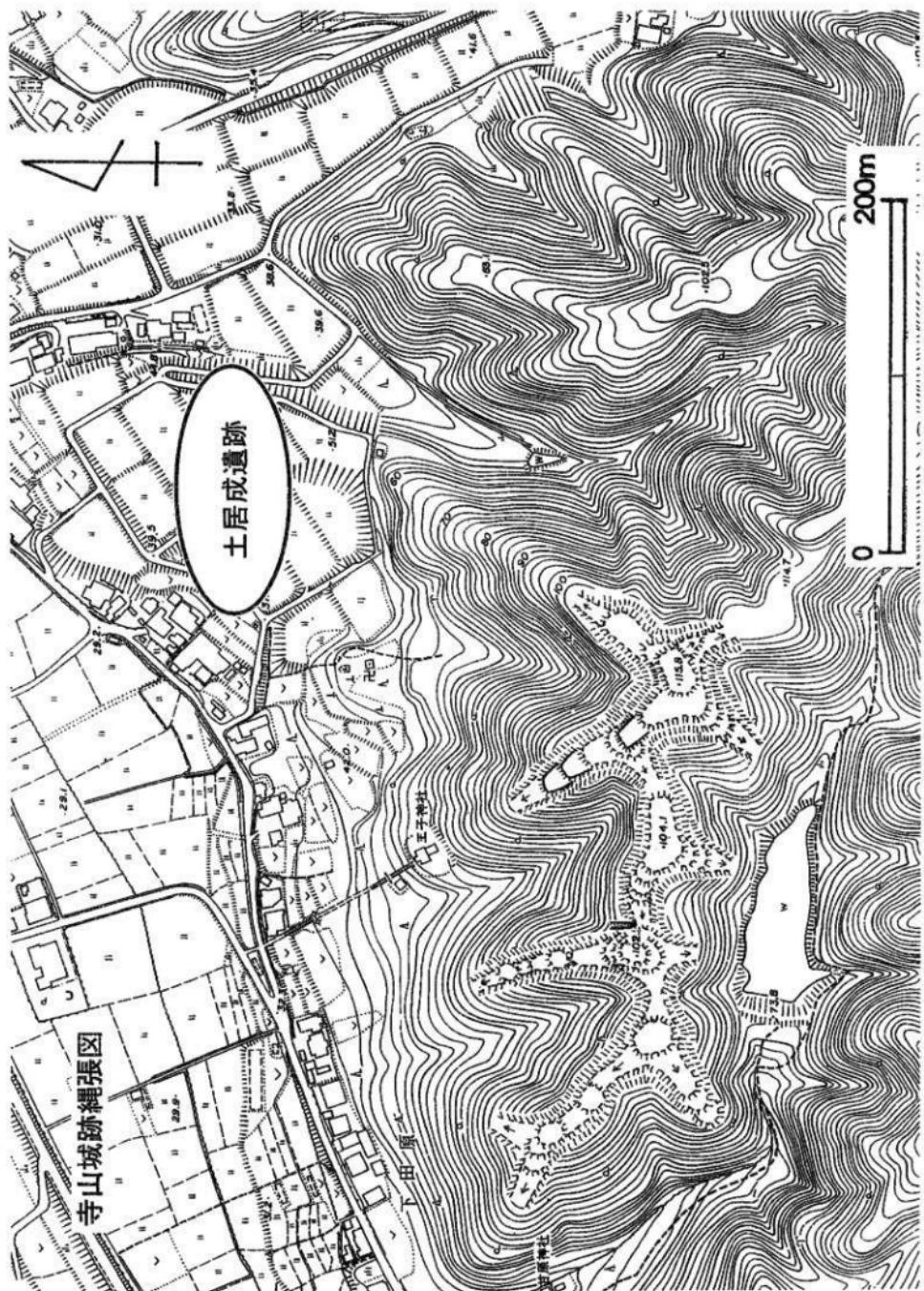


図 版



土居成遺跡遠景（北西から）



建物 1 全景（北西から）

図版 2



建物 1 区画 A 東隅角部（北東から）



建物 1 区画 A 床面被熱部（北東から）



建物 1 区画 B (北から)

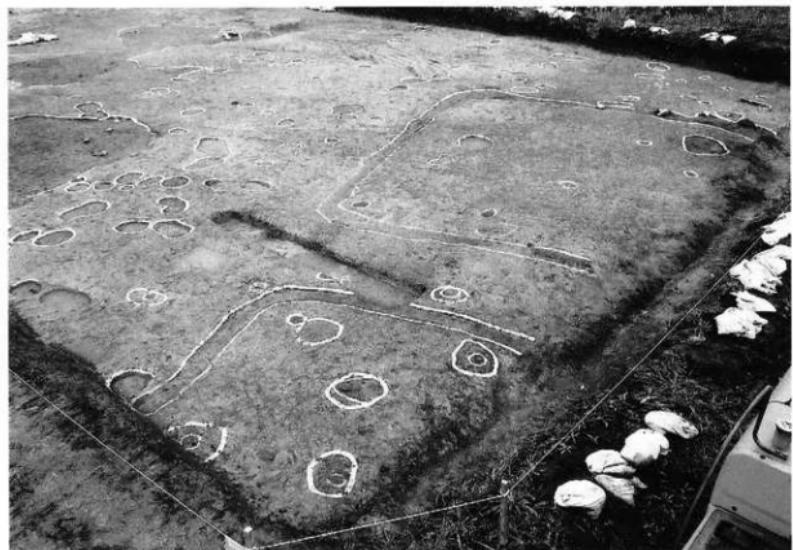


建物 1 区画 C 南西隅角部 (北から)

図版 4



建物 2・建物 5 全景（北東から）



溝状遺構 2・3 近景（北東から）

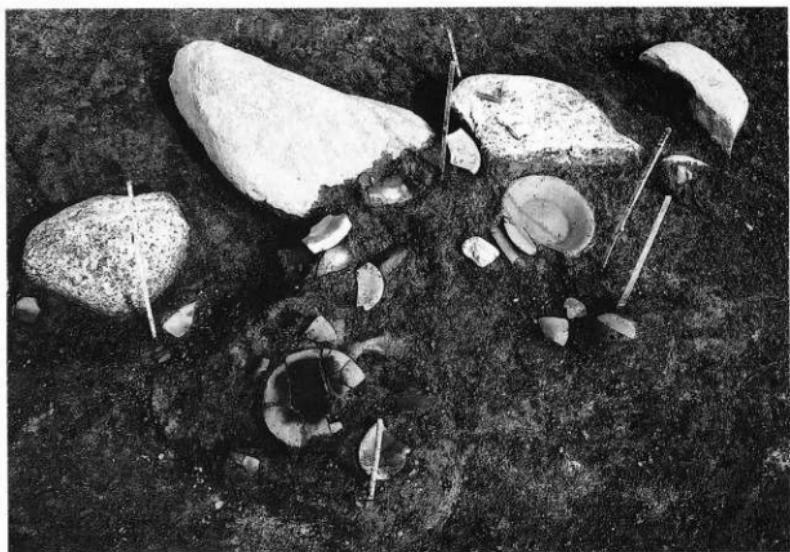


溝状造構 1・4 付近（北西から）



溝状造構 1・4（南西から）

図版 6



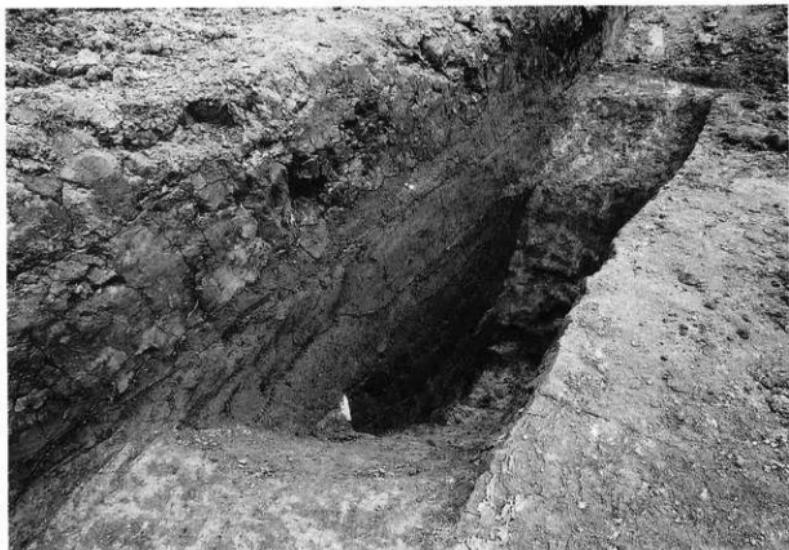
満状遺構 1 遺物出土状況（北から）



I-2 区東側（北東から）

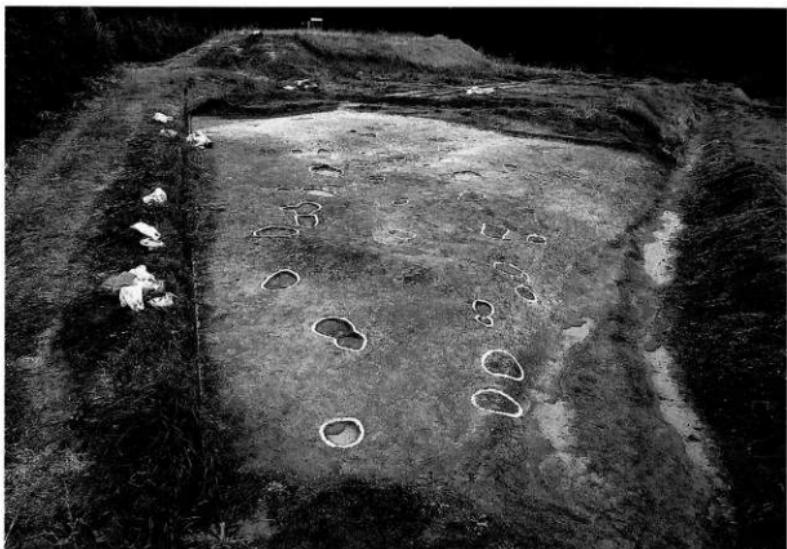


堀切1 (I-2区部分、南東から)

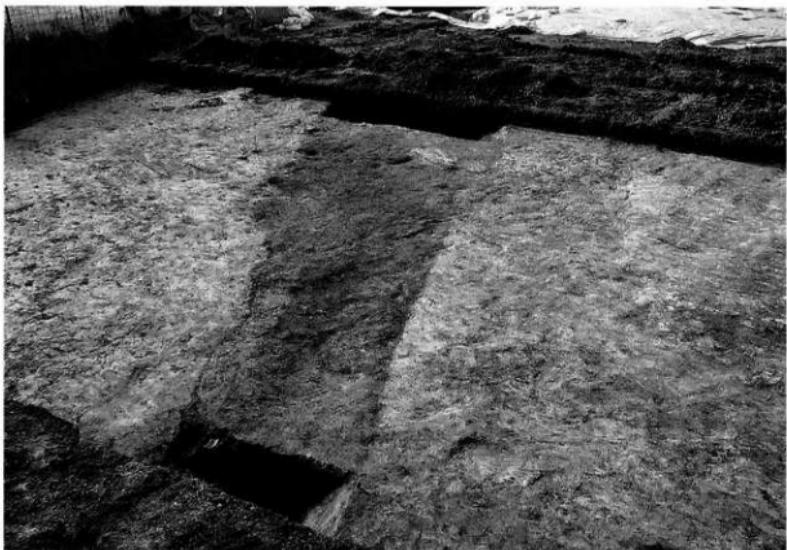


堀切1 土層断面 (北から)

図版 8



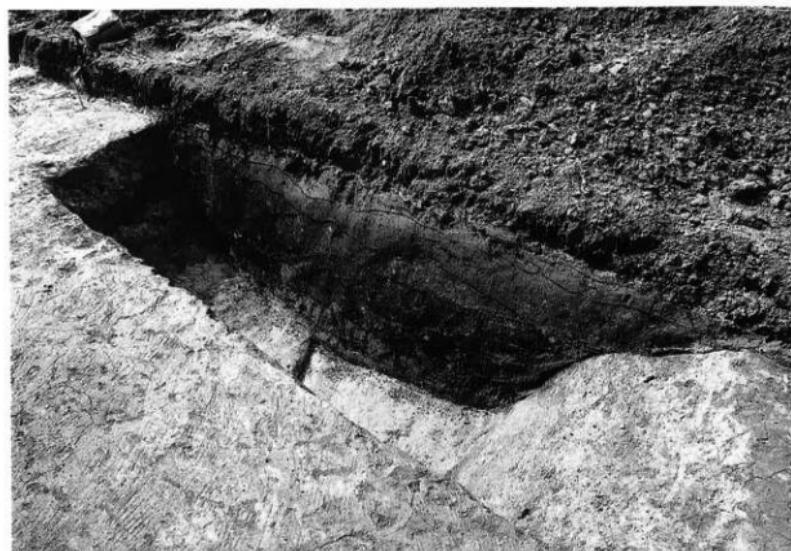
I-3区東側建物 8 (北東から)



III区堀切 2 (南東から)



堀切 2 南側土層断面（北西から）



堀切 2 北側土層断面（東から）

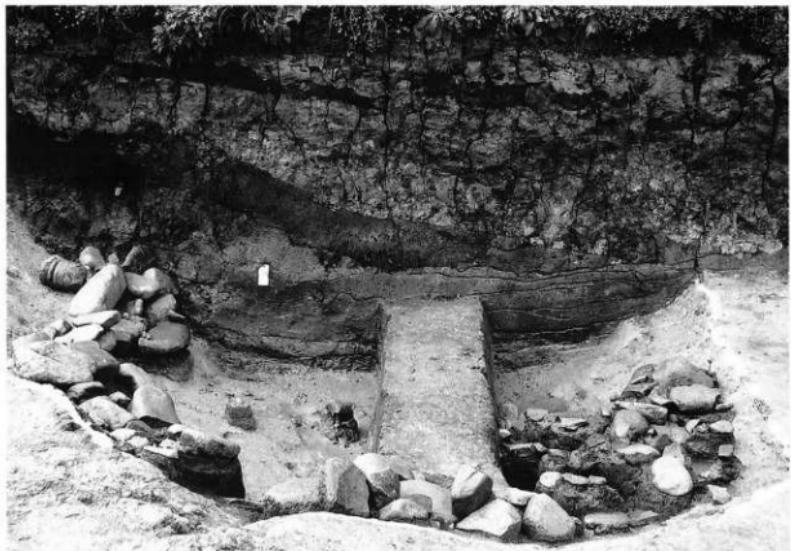
図版 10



堀切2北端部（北西から）



貼石土壤全景（南西から）



貼石土壤土層断面（北東から）



T45完掘状況（北東から）

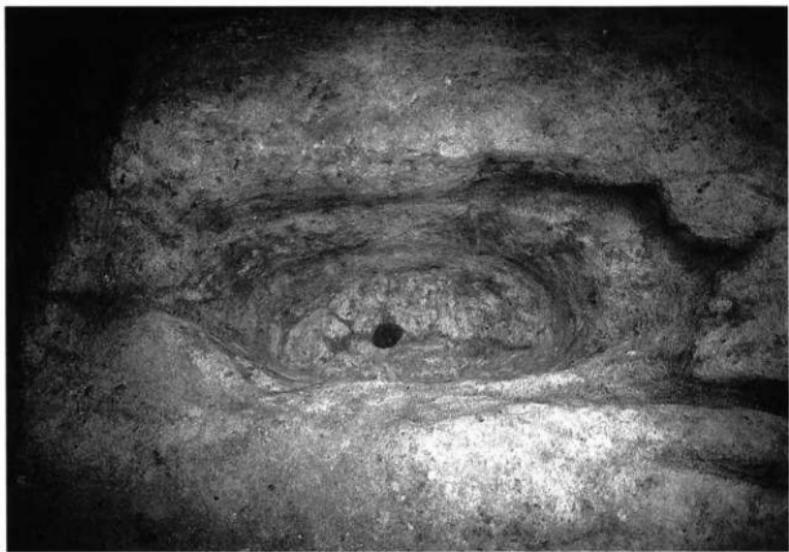
図版 12



T46完掘状況（南から）



II区全景（南西から）



Ⅲ区SK01（北東から）



Ⅱ区SK02（北から）

図版 14



IV区窯跡全景（北から）



IV区窯跡窯体部分（北から）

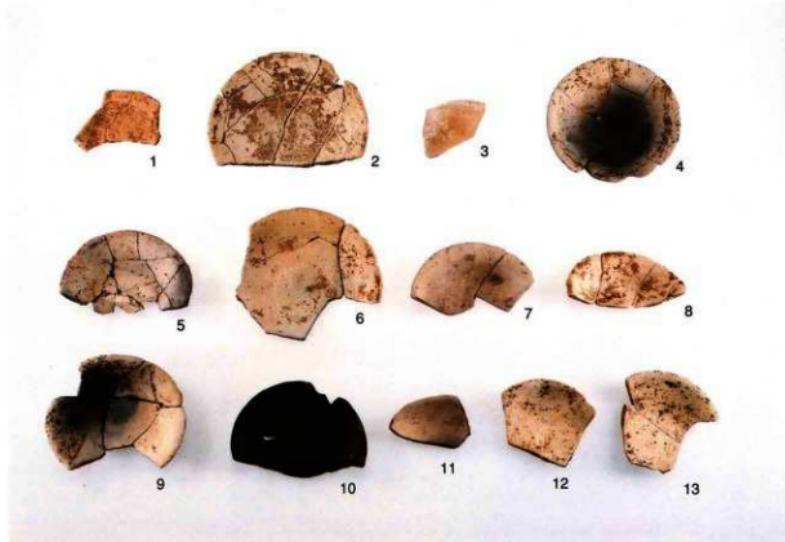


物原上の作業場（北から）



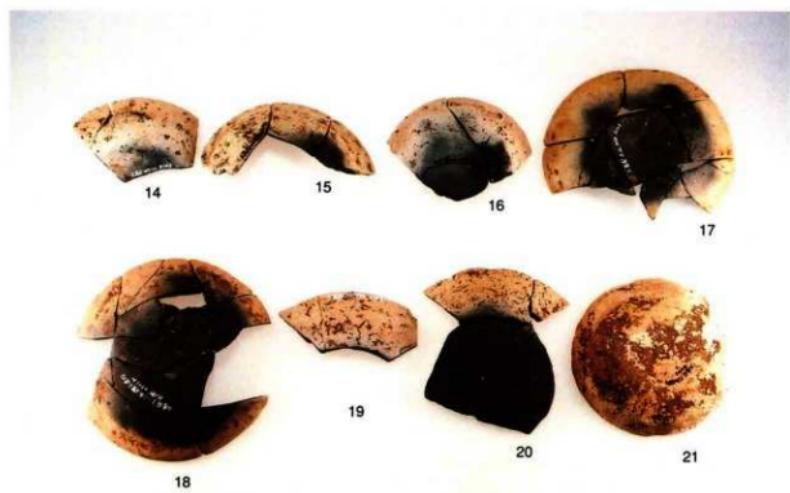
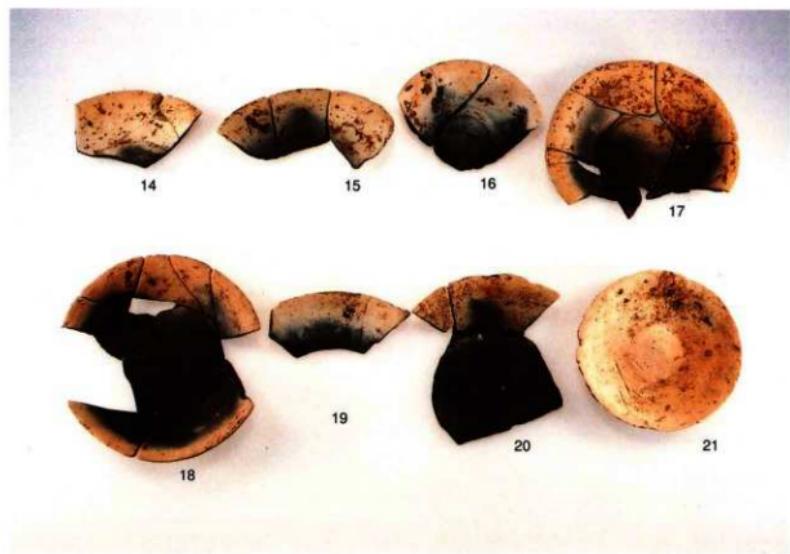
物原及び作業場断面（北東から）

図版 16



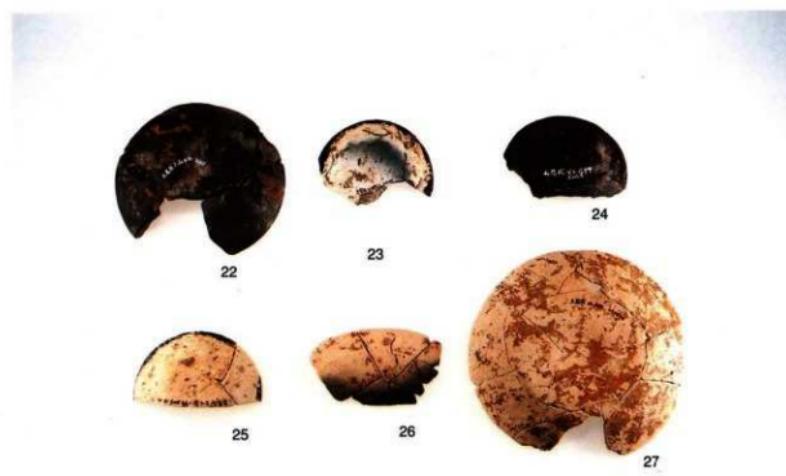
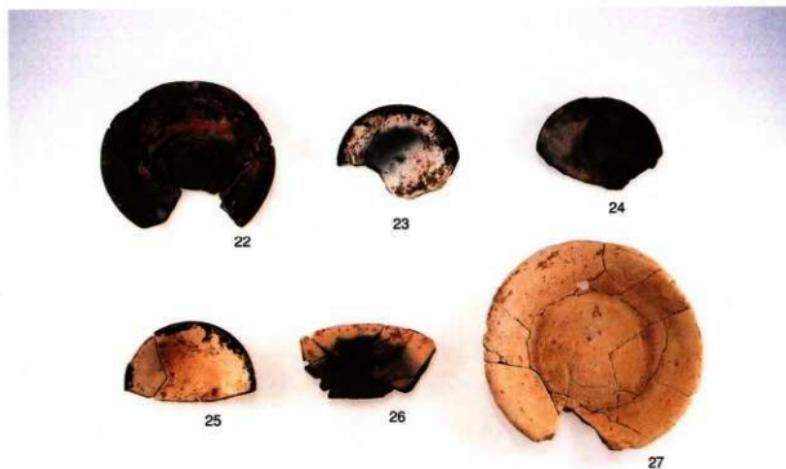
I-1区出土遺物 (1)

図版 17

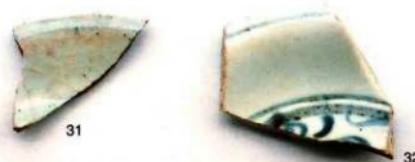


I-1区出土遺物 (2)

図版 18

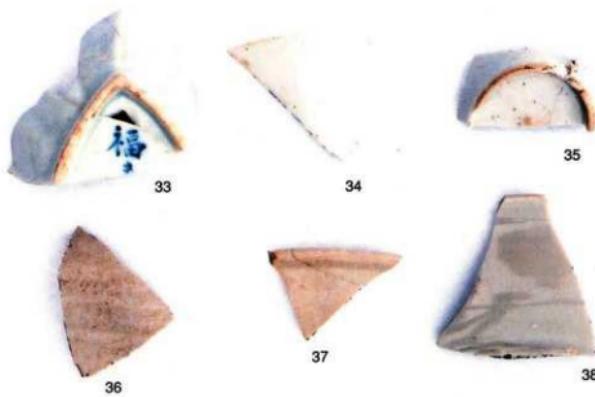
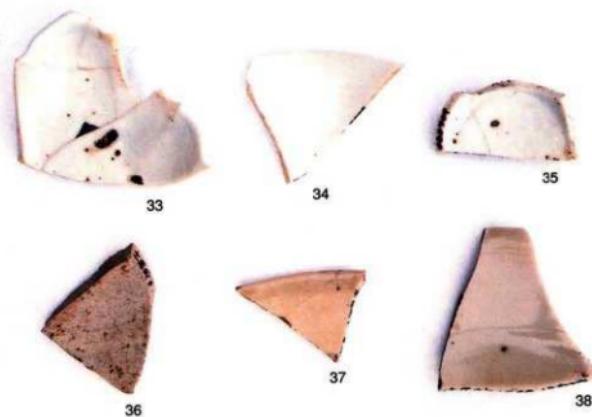


I-1区出土遺物 (3)



I-1区出土遺物(4)

図版 20



I-1区出土遺物 (5)



図版 22



I-1区出土遺物 (7)



63



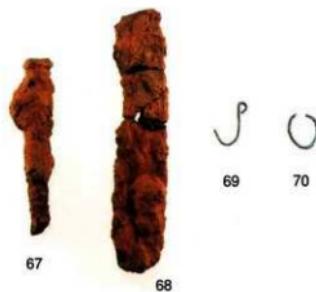
64



65



66



67

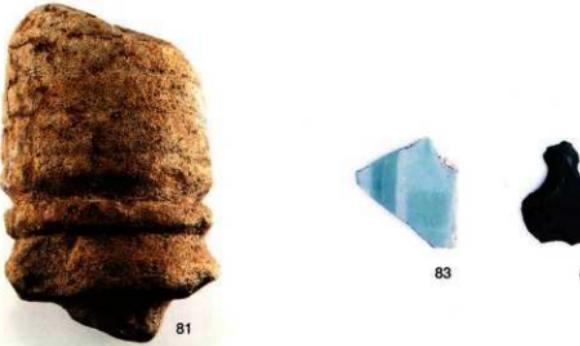
68

69

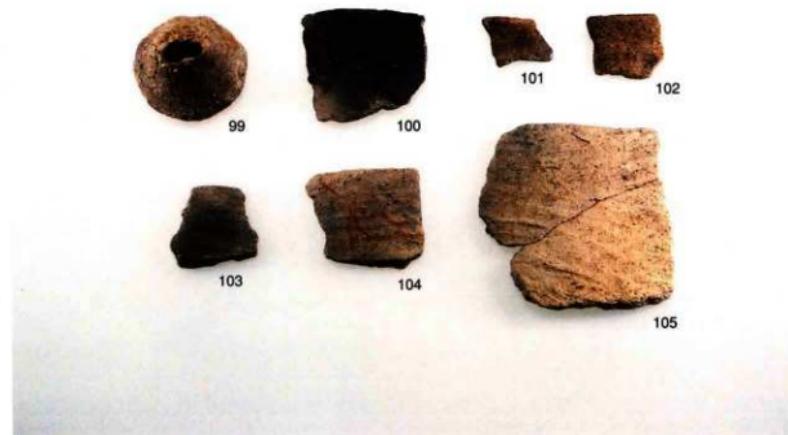
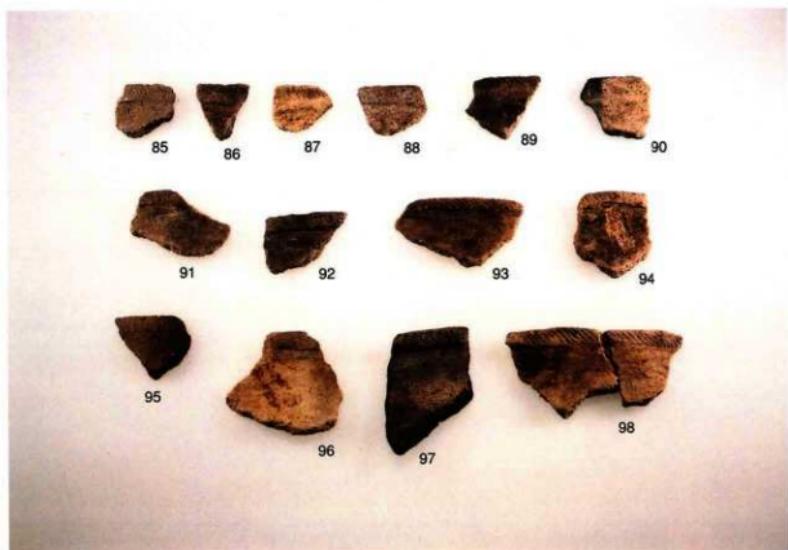
70



71



I-2区出土遺物 (72) III区出土遺物 (73~84)



II区出土遺物（1）



107



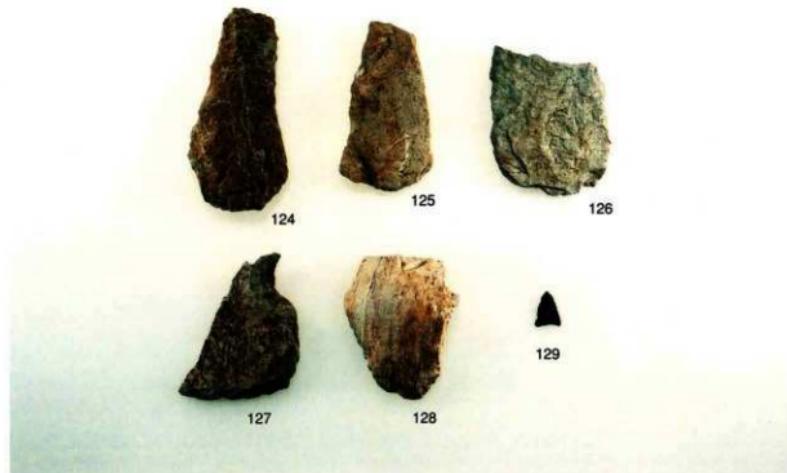
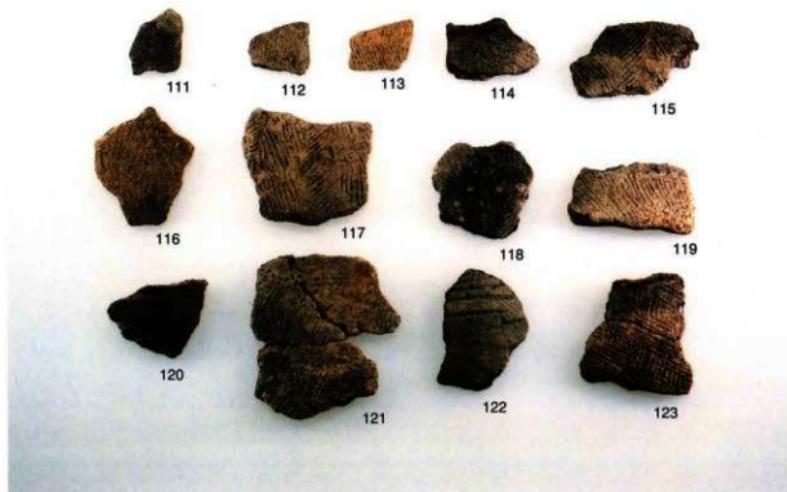
108



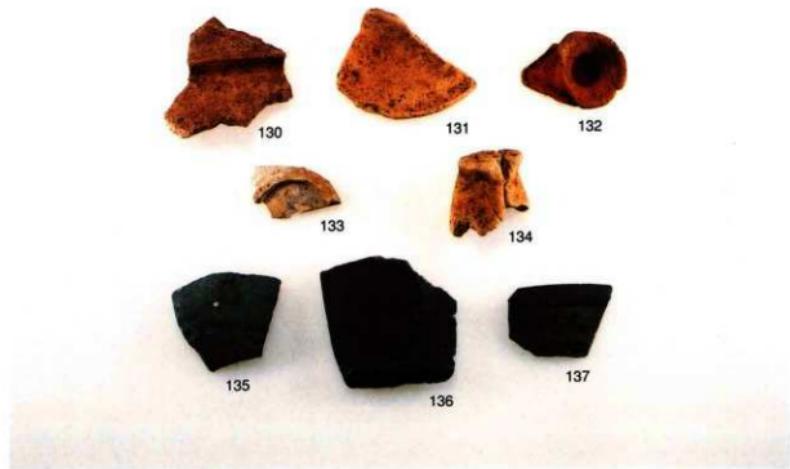
109



110



II区出土遺物（3）



II区出土遺物（130～134）その他出土遺物（135～137）



IV区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	どいなりいせきはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	土居成遺跡発掘調査報告書					
シリーズ名・番号						
編集者名	舟木聰					
編集機関	安来市教育委員会					
所在地	〒692-0207 島根県安来市伯太町東母里580番地 Tel. 0854-23-3316					
発行機関	安来市教育委員会					
発行年月日	2007年3月					
ふりがな	ふりがな	コード		世界標準座標値	調査面積	調査期間
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号			
土居成遺跡	やすざ しろせちょう 安来市広瀬町 とだ 富田	32206	C124	X=-71420、Y=91495	7500 m ²	2003年6月～ 2003年12月
調査原因	広瀬町統合中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項	
土居成遺跡	城館跡	縄文～中世	礎石建物跡1・掘立柱 建物跡8・塙切2・貼石 土塙1・溝状造構4・落 し穴2	陶磁器・土師質土器・金 属器・土製品・縄文土 器・土師器・石器	遺構現地保存	

土居成遺跡発掘調査報告書

- 広瀬統合中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成19(2007)年3月発行

発行 安来市教育委員会
島根県安来市伯太町東母里580番地

印刷 (有)太陽平版
島根県安来市神山町765-5
